慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「新萬來舎」の解体： 萬來舎/ノグチ・ルームの一部移築・復元にかかわる過誤(記憶としての建築空間： イサム・ノグチ/谷口吉郎/慶應義塾)
Sub Title	The Demolition of the Shin Banraisha : The Mistake about Preserving the Shin Banraisha(Architectural Space as Memory : Isamu NOGUCHI, Yoshiro TANIGUCHI, and Keio University)
Author	河合, 正朝(KAWAI, Masatomo)
Publisher	
Publication year	2005
Jtitle	Booklet Vol.13, (2005.) ,p.90- 134
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000013-04211354

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「新萬來舎」の解体

―― 萬來舎／ノグチ・ルームの一部移築・復元にかかわる過誤 ――

河合　正朝

わたしたちは、20世紀のモダニズム芸術を代表する傑作と評価の高い、建築家・谷口吉郎と彫刻家・イサム・ノグチの共同設計（コラボレーション）による旧第二研究室棟、すなわち、谷口が「新萬來舎」と称し、またいつ誰言うともなく「ノグチ・ルーム」と呼び慣らわされるようになった談話室および庭園と彫刻を保存することが出来ずに破壊してしまった。

新萬來舎／ノグチ・ルームの芸術性や文化財としての重要性に関しては、すでに慶應義塾内においてもこれを広く知らしめるための努力がなされ、義塾広報誌等を通じて、再三取り上げて論じられており[★1]、それゆえに保存を目的とした相応の補修を施し、使用上にも一定の制限を加えるなど、保存、維持のための処置がとられていた。しかし、にわかにおこった新設大学院の校舎建設計画によって、これまでの塾内のこうした保存に対する考えやそれに伴う言説を反古にするかのような事態が、新校舎建設の計画を担当する吉田和夫常任理事（施設・企画広報担当）のもとで進み、旧第二研究室棟建設のころ、東京工業大学の谷口吉郎教授の研究室副手として新萬來舎の設計にあたる谷口を助け、図面作成の作業に参加、完了した基本設計を携えて三田に異動し、塾職員となって、「新萬來舎／ノグチ・ルーム」の建設に直接携わった由良滋九州芸術工科大学名誉教授をして、慨嘆せしめるほどに無残な解体、破壊が行なわれた[★2]。

しかしわたしたちは、それを止めることが出来なかったのである。

新校舎建設については、2002年8月に教職員を対象とする新校舎建設基本計画に関する説明会が開催され、わたしたちの広く知るところとなった。しかし、その計画案を巡って論議が起こり、これがのちに「萬來舎問題」とも呼ばれることになる。この旧第二研究室／「新萬來舎」の解体と義塾が計画するそれを新校舎3階テラス部分への移設案によって生じた種々の問題、およびそれに係る経緯については、その重大性や緊急性に鑑み、鷲見洋一所長（当時）ならびに前田富士男副所長（当時）による報告と所見が、小特集形式で2002/03年度『慶應義塾大学アート・センター年報10』に掲

載されている[★3,4]。従って、いまはその重複を避ける意味でも多くは触れず、二氏のそれに委ねることとし、ここでは、鷲見所長がその際に、次年度に「萬來舎問題」に関する論考・資料集の編集を予告したことを受け、谷口とノグチによって創造された新萬來舎の高い芸術性を維持し、同時に文化財としての保存の正しい在り方を義塾に求めてゆくなかで、筆者が知り得るところとなったイサム・ノグチの著作権（copyright）を現在管理しているアメリカ・ニューヨークのイサム・ノグチ財団のこの問題に対する見解と、それに対する慶應義塾の対応を、同財団と義塾当局との間で交わされた文書（書簡）を中心に、出来るだけ私見を交えず、いわば資料の形で提出することによって辿り、この問題に対する識者の理解ないしはその判断のための拠としたい。

1.「萬來舎」の芸術的特質と価値

新校舎建設に端を発し、旧第二研究室棟の解体、また通称「ノグチ・ルーム」呼ばれる「萬來舎」の一部を現地から離して移築することが、その芸術的価値に照らして、どれほどに大きな問題を生じさせることになるかの認識の甘さが、その当初から義塾当局にあったことは、当センター年報に載る「『萬來舎問題』をめぐる若干の考察」と題する鷲見所長の一文の中においても明かである[★5]。鷲見氏も述べる通り、「ノグチ・ルーム」の解体・移築案決定の経過のどの時期においても、ノグチ・ルームの持つ芸術的価値を殆ど知らず、その作品の有する途方もない芸術的価値を考慮した議論が行なわれた形跡はないと筆者も考える。建設計画に当たってのコンペティションの要綱に、「歴史的建造物について留意する」という一項が加えられてはいるものの、それは近接する重要文化財である「演説館」を指すのであって、決して谷口とノグチによる「新萬來舎／ノグチ・ルーム」でなかったことは、この建設に直接携わる事務部署である塾監局管財部の幹部職員の「当初からノグチ・ルームは、解体するものと認識していた」との発言やコンペティションの第一次審査を経て採用された3社のうち大成建設を除く、大林組と竹中工務店の2社の担当者からもまた「ノグチ・ルームの芸術性に関する説明や、それゆえにその保存についての十分な考慮の必要性に係る説明はなかった」との証言によっても容易に理解出来る。筆者は、鷲見氏のいう、「アート・センター内部からも、反対運動を立ち上げて署名を集める者、あるいは東京地裁への仮処分申請に関る原告団に加わる者」[★6]のいずれにも属するが、2002年8月に開かれた教職員に対する新校舎建設の全体説明会ののち、座長を努める前田富士男氏に求められ「ノグチ・ルーム保存WG（ワーキング・グループ）」の意見交換会への参加によって、鷲見氏のいわゆる「萬來舎問題」に大きく係る結果となるのである。しかし、イサム・ノグチの令弟にあたる野口ミチオ氏とは旧知の間柄であり、また筆者がニューヨークのメトロポリタン美術館のフェローであった時期以来、同地のイサム・ノグチ財団の人々とも交友をもっていたと

はいえ、筆者はイサム・ノグチの研究家でもなく近現代の彫刻や建築を専門とする研究者でもない。自らの研究専門領域が、日本の中世から近世にかけての美術史であったので、実は、WGの意見交換会に出席したはじめのころは、「三田キャンパスで、ある建物の壁を飾る福澤諭吉の肖像画を、べつな建物の壁に気軽に掛け替えるのとは、まるで次元の違う話」とは[★7]、正直いって考えていなかった。

それは、筆者の日本中近世美術史という専門領域では、美術作品の移動、移設は珍しくなく、当然一定のルールはあるものの、茶室をはじめ城門や御殿でさえ必要に応じて移してしまうこともあり、「写し」と称してコピーを作って独自の美意識を表わしたり、それを伝統の保持や権威の証とするからである。ところが、WGの意見交換会に参加した建築、近代美術史、文化財保護などを専門とする有識者の話を聞くうちに、ノグチ作品のもつ芸術的な意味、谷口の建築の意図、そしてなによりもこれが谷口とノグチの共同設計であることの意義、すなわち両者のコラボレーションの賜物であることの重要性、それはまさに20世紀モダニズム芸術を証言する特記すべき作品であることが容易に理解出来た[★8]。室町・桃山時代の日本美術史における美意識や価値観とはまるで違うのである。ことは現代の世界的基準の芸術的な価値観や美意識をもって判断するべき対象なのである。

とくに、新萬來舎の建設に直接携わった由良滋氏の話には、さすがに説得力があり、ノグチや谷口の作品の制作の過程やその意図を十分に知ることが出来た。また、文化財保護審議会前会長の西川杏太郎氏や、長らく文化庁の建造物課に勤務された半沢重信氏らの語るところから、文化財保護の立場から、歴史的、文化財的価値を有する芸術作品に対する保存の在り方を、建築家協会保存問題委員会前委員長の篠田義男氏や現委員長の小西敏正氏からは、上下の空間軸、大地・重力という方向の問題だけでない、建築に於ける時間軸の重要性、その占める空間の時間的記憶について留意すべきことを学び得たのである。と同時に、新萬來舎の設計にあたって重視されたのは、近接する演説館との関係にあることをも知った。谷口とノグチは、模型を使ってその芸術としての造形性や空間性、時間的、思想的意味を懸命に考えたという。移築しては、谷口とノグチの創造した芸術的生命力が消滅してしまう。ここに至って、筆者は、谷口とノグチの芸術上における精神、造形意図、20世紀モダニズム芸術としての特質、また文化財としての保護、保存の在り方等を考え併せ、いま万一、慶應義塾が「新萬來舎／ノグチ・ルーム」の芸術性や歴史性を考慮し、これを保存しようとの考え[★9]のもとに事業を進めるのであれば、移築はせず、現地にそのままの状態で保存する以外に方法はないとの考えに至ったのである。筆者はこれによって、義塾当局案に異を唱える反対派と見做されることになった[★10]。

筆者が強く反対を主張したいま一つの理由に、前述する「ノグチ・ルーム保存WG」が、すでに鷲見氏や前田氏が述べているように、折角設置され、ようやくノグチ問題の専門家や関係者と呼べるに相応しいメンバーが

集められ、貴重な論議が重ねられたにも拘らず、それが決して塾長や担当理事が判断を委ねるべき「諮問委員会」の役割を与えられず、どこまでも大学当局の傘下で与えられた課題について検討する「作業部会」という位置にとどまっていたことにあった[★11]。鷲見氏はさらに、慶應義塾は、イサム・ノグチの作品に手を加えるにあったって、専門家の意見をほとんど徴さず、どこまでもアマチュアの組織だけで無邪気にことを進めてしまったことを指摘し、専門の関連機関や専門家への照会を一切行わず、いわば門外漢の性急な判断だけで、こともあろうにコンペまで開催し、解体移築案を採択してしまったと断じている。慶應義塾も専門家の意見を聞こうとしなかった訳ではないことは、WGの設置とほぼ同じ時期に、酒井忠康（神奈川県立近代美術館館長[当時]）、仙田満（東京工業大学教授）、新見隆（武蔵野美術大学教授）、広井力（東京学芸大学名誉教授）に委嘱し、「アドバイザリー委員会」を設置したことが示している。美術史家、建築家、彫刻家を集めた立派な委員会である。ところが、WGの意見交換会が5回開催され、報告書まで出来ているのに対し、「アドバイザリー委員会」はただ一度開かれただけだと聞いているが、それでは、そこでどのような意見が出され、その意見がノグチ・ルームの保存計画のなかにどのように反映しているかなど、それが開示されたことを聞いていない。これでは、委員会は塾当局がことを大過なく運ぶためのいわば通過儀礼的な性格をもつ自己保全のための安全装置ではないか、と非難されても反論が難しかろう。多くの意見を聴取し、論議を経たうえでの結論であることを担当理事が表向きに表明するための任務を負わされた装置とみなされかねまい。

「ノグチ・ルーム保存WG」の座長を委嘱された前田氏も、従ってまことに微妙な立場に立たされたことになる。すなわち、あくまで「ノグチ・ルーム」を新校舎3階ルーフテラス部分に移築することを大前提としてWGにおける論議を進め、そのうえで、3階への移築の正当性、および、それが芸術的精神や芸術的価値を保持し得ているかどうかを芸術学や近現代美術史学の立場から理論的にまとめ上げる作業をするよう求められたわけだからである。筆者はこの問題に関してはいわば素人である。しかし、ヨーロッパ近代美術や芸術学を専門とする前田氏は、言ってみればプロであり、その学問的な業績も世に高く評価されている。前田氏には、研究者としての立場に従って「萬來舎移築問題」に取組み、その問題点を明らかにするとともに、参加した専門家の意見をも正しく聴取し、学問的にも質の高い報告をしてもらわなくてはならない。前田氏は実に危うい位置に立たされたことになる。研究者である前田氏が、学問的に自由な発言の場を担保される、それには、一方において芸術や文化財をその専門的、学問的に議論に耐え得る強い反対意見があることが必要であった。筆者もまた20世紀モダニズム芸術の本質とは何か、文化財的にも歴史的にも価値のある近代建造物の取り扱いと保存の在り方の如何、また知的財産権・著作権の問題などに対する知識などといったことに就いて、深い洞察力を持たなくてはな

らなかった。しかし、前田氏に対する不安は、それが筆者の思慮の浅い危惧であったことは、学問的にも高い評価を与えることの出来る優れた内容を持つ、「ノグチ・ルーム保存WGによる活動報告ならびに答申」(2002年12月12日作成)、いわゆる「前田報告」としてまとめ上げられ、2002年12月に吉田和夫理事に提出された報告の内容によって明らかである★12。

この「前田報告」が、吉田理事の意図を満たすものでなかったことは、前田氏自身が、「前田報告については、昨年12月から現在にいたるまでWGもしくはWG座長が担当理事と面談する機会、あるいはタスク設定者の大成建設社との意見交換を行う機会はなかった。このことは、大学における教育研究以外の業務に疎い筆者には、まことに意外な経験であった」と2003年3月31日付論考で述べていることからも十分に想像がつこう★13。

「前田報告」は、慶應義塾当局による計画、つまり建築の2階部分を切除して1階のノグチ・ルーム部分のみを移設する計画について、「造形的にみれば加害的行為に等しい」と批判した。そのためか(最終的にはこの部分の批判は受けいれられたようで建築2階部分も含む移設となった。しかし、工事の最後の段階でノグチ・ルーム天井部分は取りはずされ、旧2階の吹きぬけのデザインとなった。)、あるいは慶應義塾に対して文化財保護における慎重な審議と意思決定過程における透明性と公開性をつよく求めたためか、ともかくこの前田報告は「黙殺」に近いものとなった★14。今回の推移における慶應義塾当局の姿勢について言えば、たとえ意見聴取の場を設定したとしても、それは議論を経た足跡を残すための手続きにほかならず、結局のところ自らの下した結論、さきに下した決定を優先し、その決定に近い部分に関しては意見を取り入れたかに見せ、それ以外はいわば「聞きおく」に留めるのみであった。自らの決定・結論については「ご理解いただけると考えております」★15と固執し、つねに相手が自分を理解し了解してくれると一方的に判断し、相手から出された提案に対して開かれた議論や協議を重ねようとする努力がほとんど認められなかった。当局にとってのいわゆる反対派たちはけっして理不尽な主張をしたわけではない。新校舎の竣工予定や工期の現実的条件を勘案し、技術的に可能と思われる提案や代替案、要望を提示したはずである。ことは文化的学術的水準での問題なのである。にもかかわらず、批判にはひたすら扉を閉ざし、判断の決定にいたる過程を明らかにすることがないなど、その姿勢は、学塾にあるべき意志決定過程の透明性を欠くものと指弾されても仕方あるまい。この学塾は「文化の護りたからかに、貫き樹てし誇り」(塾歌)をもっていたはずである。

こうした慶應義塾の取組み方が、いわゆる「萬來舎問題」を起こすことになり、また後に述べる、イサム・ノグチの著作権を管理する米国・ニューヨークのイサム・ノグチ財団との関係を拗らせ、硬化させることになるのである。

2.「新萬來舎／ノグチ・ルーム」の現地保存

谷口吉郎とイサム・ノグチのコラボレーションによって創造された20世紀モダニズム芸術を代表するこの芸術的、文化的遺産が、作者自身が定めた特定の場所、その地上に根ざして定置されるところに芸術的な最大の特徴や重要な意味を有することは、すでにしばしば論じられ、専門家の熟知するところである[★16]。前述の鷲見氏の言をもって「いわば<ローカル>な文化財である演説館や旧図書館とは違い、ノグチ・ルームとは、世界のどこに出しても通用する超一級の芸術作品なのである」と云わしめたこの作品について、はやく2002年5月からすでに保存や慎重審議を求める声があがっている[★17]。やがて、この造形作品を現地に保存することを要望する動きは、2002年10月に塾員、塾教員ら32人の発起人からなる「新萬來舎／ノグチ・ルームの保存を要望する会」が結成されたことで具体化し、ほぼ同時に保存に賛同する人々からの署名が集められ始めた[★18]。2002年11月11日付けで、安西祐一郎塾長宛てに「新萬來舎／ノグチ・ルームの保存を要望する会」からの要望書が提出され、次いで義塾教職員に対して、塾長宛ての要望書を添えて、保存についての賛同と支援を呼びかける文書を、代表世話人名で送付した。この保存活動に呼応するかのように、学外の二つの団体から、「新萬來舎／ノグチ・ルーム」の歴史的、芸術的重要性に鑑み、強い保存の要望が塾長に対して出された。

その一は、社団法人日本建築家協会関東甲信越支部具長と保存問題委員会委員長の連名で出された「慶應義塾大学萬來舎（第二研究室）の保存についての要望」（2003年1月6日付、資料1）である。ここでは、「失われた建物に刻まれた時間の重みは二度と取り返すことが出来ない」ことを指摘するとともに、谷口とノグチの類希なコラボレーションの賜物である萬來舎に宿るその精神性と空間の研ぎ澄まされた繊細な魅力を後世に十分伝えられるよう」さらなる検討を望む要望がなされている。

その二は、国外に組織された「新萬來舎保存のための国際委員会」(International Committee to Preserve Shinbanraisha)[★19]であり、この委員会の趣旨に賛同し、これに署名する200名近くの人々が名を連らねる。この中には、ニューヨーク近代美術館館長のグレン・ロウリ（Glenn Lowry)、ハーシュホーン彫刻庭園美術館名誉館長のジェームズ・デメトリオン(James Demetrion)、ハーバード大学教授・ライシャワー日本研究所長のアンドリュー・ゴードン（Andrew Gordon)、スペイン・マドリッド王妃ソフィア美術センター館長のマニュエル・ボネ（Manuel Bonet）ほか、ドイツ、デンマーク、カナダなどからも著名な専門家、研究者が参加しており、日本からはニューヨークのイサム・ノグチ財団の理事をも務めるセゾン財団代表の堤清二、森美術館館長のデヴィッド・エリオット（David Elliott）などの諸氏の名を見出す。また、米国カリフォルニア州のコスタ・メッサ市のショッピング・モールに内におけるイサム・ノグチ作品の撤去計画を反対運動によって中止させることに成功した組織の人たちも、「新萬來舎／ノ

グチ・ルーム」の解体移築に反対するこの署名の呼びかけを行っている(資料2)★20。

「新萬來舎保存のため（要望書）の国際委員会」は、安西塾長に宛てた2003年1月7日付の書面の中で、「美術と社会におけるその役割について関心を持つインターナショナル・コミュニテイーのメンバーとして、われわれ署名人は、この特定の場所のために創作された芸術作品を国際的な文化的協同精神の記念碑として保存するための努力を行っている日本の多くの人々を支援するとともに、慶應義塾に対して、この芸術作品を解体や移築することにより自己の文化的遺産を破壊することのないよう、強く要望する」と、ここでも前の建築家協会と同様の強い要望がなされている（資料3)。この「国際委員会」が「日本近代美術の発展史上重要な時期に制作された美術史上この上ない価値を有する」とする、作品のもつ芸術性において最も重要な点であると指摘するのは、それが「特定の場所のために創作された芸術作品（site-specific work of art)」であるということである★21。これは後に述べる、ニューヨークのイサム・ノグチ財団の主張と一致し、齟齬をきたすところのない重要な概念の指摘である。

「作者自身が特別に定めた場所のために創作された作品」、すなわち、「サイト・スペシフィック（site-specific)」の芸術作品、ないしは「サイト指定型の作品」であることが、20世紀戦後モダニズムからポスト・モダニズムへの時代のなかで、世界的な規模において創造的な造形芸術を先導してきたイサム・ノグチの芸術の最大の特徴であり、この作品が、サイト・スペシフックであるという特徴は、建築とのコラボレーション、のちの環境芸術といったものに結びつき、今日の現代芸術の特質や価値観へとつながる美的理念となる。この重要な指摘やノグチの作品のもつその芸術的特質を、義塾当局、なかんずく担当理事が見過ごし、あるいは理解できなかったところに、最大の過誤があったと言うべきであろう。「ノグチ・ルームは新校舎3階に移築して物理的に出来る限り復元し、イサム・ノグチと谷口吉郎のコラボレーションの作品の空間性と精神を継承する」といい、「精神性の保存」、「空間性の保存」などが語られ、「イサム・ノグチと谷口吉郎によって再現化した萬來舎の精神を、更に未来へと継承して行く必要がある」と述べ、さらに「彫刻無の円相の中に西方の落日が浮かび上がるというモチーフを重視して、オリジナルの方位を正確に継承する」とされるが★22、それはそもそもノグチの芸術や20世紀現代芸術の本質を理解しないとことから生じる誤解であり、もともとこの種の芸術の場合、「円相のなかに落日が浮かび上がる」のを見るのは、一人それを創った芸術家であって、わたしたちにそれを見ることを芸術家がいたずらな期待をしたり、強制し、誰にでもそれを見せようと意図などしてはいないのである。このあたりに人文社会学系と担当理事のような自然科学系の科学者の間には理解力と想像力の差異があると言いうるのだろうか★23。

「新萬來舎／ノグチ・ルーム」を現地から離してはならいのには、まだ

訳がある。谷口とノグチが、新萬來舎を共同設計するにあたり重視したのは、東側の小高い位置に建つ演説館との間に成立する造形的空間関係である。二人の芸術家は、その位置、高低、距離、造形的緊張関係など、あらゆる点から検討を繰り返し、そこに独自のデザインを創りだしたのである。谷口の言う、福澤諭吉の演説館のもつ「意匠のモラル」とはおそらくそれを働きかけるところのものを指しているのだろう。そしていま一つ新萬來舎が、三田キャンパスの崖を控えた南西の角に演説館との密接な空間を保ち、そこに建っている理由に、これと対峙する位置にあたる東北の、いわゆる鬼門にあたる場所に旧図書館が建てられているということを見逃してはならない。すなわち、キャンパスの鬼門にあたる位置に、いわば知の集積の象徴としての図書館が位置し、その裏鬼門にあたる場所に、知の発信の象徴としての演説館と萬來舎が密接不可分な空間関係を保って建てられているのである。ここに、図書館と演説館・萬來舎を結ぶキャンパスの軸線が設定され、いわば構内都市計画とでもよべる確固とした建築プランが成立していることを見い出せるのである。萬來舎の壁面線が西校舎に対して東に飛び出しているとの指摘もあるが[★24]、上記のことに基づくためであろう。従ってノグチの作品もまた、全体のプランが東西の軸線を強調したものとなっていることは明瞭であり、彫刻《無》もまたそれによって大地に根ざすように定置されているのである。解体と移築によってそれらは全て破壊されてしまうのである。

慶應義塾当局の示す「保存のコンセプト」に、萬來舎の精神の再現、歴史的建造物の保存、将来を視野に入れたキャンパス計画等が上げられ、「ノグチ・ルームは新校舎3階に移築して物理的に出来る限り復元し、イサム・ノグチと谷口吉郎のコラボレーションの作品の空間と精神性を継承する」とし、その際に「精神性の保存」や「空間性の保存」[★25]が可能になると述べている。しかし、前述のように作家自身の決定によって定置された場所からそれを移したのでは、サイト・スペシフィック作品の芸術的意味が失われ、その芸術作品の精神を消滅させることになるのである。一方、美術におけるオーセンティシティの概念に関しても言及するところがあり、「大学院校舎が建設され位置が動かされてしまった時点でそのオーセンティシティは一部失われてしまった」と断定するが[★26]、今日の文化財保護や文化財的な意味を持つ芸術作品に関る保存の観点からすれば、仮令かろうじて遺された制作当初の作品の一部であっても、出来るだけそのオリジナル部分をそのまま良好に保存し、その活用に務めるべきなのである。でなければ奈良時代に創建された法隆寺や薬師寺などの堂塔を現在見ることも、またそこからわたしたちが学ぶことも出来ないのである。加えてこれらの文化財が幸い今日に遺されたのは、そこが古代における最高の知識の集積の場である寺院、いわば学校であったことを、教育・研究機関の構成員としてのわたしたちは肝に銘じておく必要があろう。

3.「萬來舎問題」に対する慶應義塾の対応

萬來舎の保存要望に対する義塾の対応は、2003（平成15）年1月18日付け安西祐一郎塾長名で、「旧第二研究室（新萬來舎／ノグチ・ルーム）の保存を要望する会」宛てに送付された「慶應義塾大学旧第二研究室（新萬來舎／イサム・ノグチルーム）の保存に関する慶應義塾の方針」と題する書面によって明らかにされた（資料4）。そのおおよそは、以下のような内容である。

1．できるだけ多くの方の意見を反映して計画を進めるために設計競技（いわゆるコンペ）を行った。
2．平成14年6月から基本設計に着手し、「慶應義塾美術品管理[運用]委員会の前田教授にお世話いただき、イサム・ノグチルームとその庭園および彫刻の移設に関して多くの関係者からのヒヤリング」すなわち前述の「ノグチ・ルーム保存WG」を同年の12月まで重ねてきた。
3．その間に「貴会から保存の要望が提出」されたので、「ヒヤリングと同様貴要望も貴重なご意見として参考にし」、これまで基本設計に鋭意努力してきた。
4．イサム・ノグチルームとその庭園に関しては、その空間と精神性を継承するために、一貫して保存を条件とする立場を慶應義塾は貫いており、コンペの段階から、「要綱にノグチ・ルームの保存を条件」にしてきた。
5．ノグチ・ルームとその庭園および彫刻の保存に関しては、その制作に関った彫刻家、建築家、美術家など多くの専門家の「ご意見を拝聴し、これまで設計に生かして」きたことから「ご理解いただける」と考える。
6．キャンパス狭隘なスペースの限界性から現状保存出来ないことは遺憾であるが、「ノグチ・ルームとその庭園および彫刻をできる限り現状の状態でかつ方位および彫刻との位置関係を忠実に再現して」、新校舎三階の屋上に移設することで、谷口とノグチのコラボレーションの空間と精神性を継承しようと考える。

このうち、2および3に関しては、「保存を要望する会」の要望するところはもとより、前に述べた通り、ヒヤリングでの意見の集約を含む保存に関する優れた提言である「前田報告」が、すでに吉田理事のもとに提出されているにも拘らず、この時点で、その反映を見ることは難しい。また、5に言う多くの専門家の意見を聴取し参考とした形跡もほとんど認められない。そのことは、のちに触れる谷口吉郎の門下生による「谷口吉郎先生の『萬來舎』の21世紀の意義を問う会」（資料5）やさらに広い範囲の建築家たちの参加を得た保存を要望する集まり「慶應義塾の『萬來舎』の現状保存を強く求める建築家の会」（代表・青木志郎東京工業大学名誉教授）から出された提言からも解るであろう（資料6）。一方、前述したようにコンペの「要

綱」に「ノグチ・ルームの保存を条件」にした形跡は何処にも無い。論評や筆者の個人的見解はここでは出来るだけ控えたいが、「谷口とノグチのコラボレーションの空間と精神性を継承しようと考える」のは結構だが、美術史や建築史を専門とする者には、あまりの無理解さと独善的な誤解といったものが、そこに見えてしまうのである。「保存WG」の設置や専門家からの意見聴取も、結局のところ前述するように義塾当局の新校舎建設計画のための、一つの手続にすぎなかったといえよう。

そうしたことを考えた時期に、吉田理事が筆者に対して、アメリカでの「新萬來舎保存のための国際委員会」をはじめ、ニューヨークのイサム・ノグチ財団の移築反対の見解は、ショージ・サダオ理事が一人で行っていることであり、米国ノグチ財団の見解とは認めなられないと発言された。筆者は早速、ニューヨークのサダオ氏に電話をし、それを確かめるとともに、理事長のアイザック・シャピロ氏には、財団としての見解を慶應義塾に伝えるように要請した。その結果、2003年2月13日付で、シャピロ理事長から安西塾長宛てに、財団としての見解が示された（資料7）。そこではおおよそ次のようなことが述べられている。

ニューヨークで最近行われたイサム・ノグチ財団の理事会で、谷口吉郎とイサム・ノグチの共同デザインによって生まれた新萬來舎／ノグチ・ルームの取り壊しを慶應義塾が検討していることについて、論議がなされた。本日は、理事一同の考えを伝えるが、慶應義塾のような物理的に拡張困難な大学が教育関連施設の場所を確保する難しさは十分に承知している。これらの要望を満たすことを目指すともに、唯一無二の、歴史的な建造物や文化的な美術作品を保存することも重要で、その保存は過去に敬意を払うことにほかならない。新萬來舎は、慶應義塾の重要な文化財で、最高水準の知的刺激にあふれた教育環境を提供する慶應義塾の姿勢を示す素晴らしい作品として世界的基準で認識されている。ノグチ・ルームの扱いについて最終的決定はまだなされていない。イサム・ノグチ財団は、状況の新たな再検討をお勧めするとともに、ノグチ・ルームと庭園が現在ある場所に完全に維持されるように建築的解決策の熟考と配慮をお願いしたい。作家が意図した場所で意図したように体験されてはじめて真の力を発揮する芸術作品があるとすれば、イサム・ノグチの作品は、特にこれに当てはまる。理事会は、サイト・スペシフィックに制作された部屋と庭園を新萬來舎のために移築したり、手を加えたりすることは、ノグチの意図をゆがめるのみならず、創られてから50年もの間、日本だけでなく世界の20世紀美術の記念碑的作品として国際的に認知されている作品に対して取り返しのつかない損傷を与えるものと強く信じる。

以上のように、ニューヨークのノグチ財団は、慶應義塾の計画する「新萬来舎／ノグチ・ルーム」を新校舎3階のテラス部分への移築を認めず、現在ある場所に完全に維持されることを強く要請し、移築したり手を加えたりすることは、ノグチの芸術作品の破壊であると明言している。その理

由は、ノグチ・ルームが芸術家の特別に定めた場所に帰属するサイト・スペシフィックな構造を持つ作品であるから、としている。

これに対し慶應義塾安西塾長は、「新萬來舎保存のための国際委員会」に、2003年2月20日付けで、書簡を送っている。その内容は、「新萬來舎／ノグチ・ルームの保存を要望する会」に送られた書面とほとんど変わらないものであったが、書面の終わり近くの部分で、故谷口吉郎の門下生たちとも正式に協議をしたことを報告するとともに、協議に基づきノグチ・ルームにつながる螺旋階段と独特の窓枠および建物のファサードを保存することに決定したとしている。このような保存を通して、この重要な遺産の象徴する空間と精神とを維持していきたいと考えている、と述べ、「この報告が、請願書を頂きました皆様のご理解とご承認を頂くに足る情報を提供したと信じます」と結んでいる★27。

しかし、筆者が仄聞するところでは、新校舎建設の計画が持ち上がる前後から義塾当局と接触があった考えられる関龍夫、仙田満の両教授を除いて、谷口の門下生たちと義塾が正式に協議を行った形跡はこの時点ではない。ただし、門下生のうち由良滋（10月17日開催）、半沢重信（10月21日開催）の両氏は、「保存WG」の意見交換会に出席し、義塾の提案する萬來舎の移築案に反対を表明している。また、半沢氏は、2003年1月27日に仙田教授とともに塾長、理事らと面会した際、義塾案に賛意を示さず（同氏は同年3月吉日付けで塾長に宛て、その所見を述べた書簡を送っている）、義塾の計画する新校舎の機能を損なうことなく、かつ萬來舎を移築せずに現地に保存し、新校舎と萬來舎が不都合なくそのまま共存できる代案を提示している。谷口の門下生たちが、慶應義塾と正式に接触する機会を持つのは、前の「谷口吉郎先生の『萬來舎』の21世紀の意義を問う会」（世話人代表　青木志郎東京工業大学名誉教授）が、安西塾長宛（2003年5月4日付）に、谷口とノグチの「設計・制作の基盤となる思惟を計り、演説館と萬來舎の緊張ある空間の現状を維持し、再整備と活性化を求める」要望書を送る前後のことかと思われる。この要望書では、大学院校舎が建ったため、谷口の設計当初とは建築の空間的バランスが大きく崩れたので、萬來舎を撤去してもよいというのは、解体の理由にならないと指摘するとともに、「現状をそのまま整備されるならば、作品的価値と貴塾の趣旨とされる教育上の効果は将来無限に拡がる」が「残念ながら現設計案は歴史的な貴重な遺産の一部形骸として残すに留め、技術一辺倒の建築物を残そうとする20世紀型に属するものであり」、「21世紀の社会を導く立場の慶應義塾大学として、萬來舎を原形のまま残し、整備するころを関係者が心の問題として捉え、考えるべきとである」と、21世紀が心や環境意識が問われる世紀であり、義塾のそれに相応しい対応をとるよう求めている。従って、「保存のための国際委員会」（代表ショージ・サダオ）に送った、義塾の書簡の内容は、いかにも読み手の誤解を招きそうである。

こうしたいわば新校舎建設計画に不透明さを感じさせるなかで、2月下

旬から3月始めにかけて、経済学部、法学部、文学部などの学部会議ないしは教授会において、担当の吉田和夫常任理事と黒田昌裕常任理事による説明会が開かれ、各学部の会議でも「新萬來舎／ノグチ・ルーム」の保存に関する相当に激しい質疑がなされたが、この問題に関して義塾の教職員をミスリードしかねない吉田理事の一方的な報告と発言が目立ち、正しく情報を開示していないとの意見や批判が次々と出された。このあたりの様子に関しては、のちに筆者らと「保存を求める会」を結成し、その世話人代表として筆者とともに、安西祐一郎塾長を相手に萬來舎解体の工事中止を求める仮処分を東京地裁に申したてることになる松村高夫経済学部教授が経済学部学部会議での様子を的確にまとめているので、すこし長い引用になるがここに記しておきたい[★28]。

> 私が萬來舎の保存を求める活動の加わったには今年の3月になってからである。加わった理由は、文化財・芸術作品を、企業ならいざしらず（最近は企業も文化財の保護を工夫しているが）、大学が護れなくて、どこに大学の存在意義はあるというのだろうか、という単純なものである。加わったきっかけは、今年2月に経済学部の学部会議にこの件で説明にきた吉田担当理事の説明が余りにひどかったことにある。ノグチ・ルームの芸術的価値にはまったく無理解なのは予想したとおりであったが、事実関係で教員をミスリードする報告だったので、私は驚きその不誠実さに憤った。吉田理事は「ノグチ・ルームの保存についてアメリカのノグチ財団の見解はいろいろあってまとまっていない、だから総合的に判断して解体・『移築』することになった。学内的にも正当な手続きをとって承認されている」といった。すぐに教員から批判的な意見や質問がなされた。私も手元にあった米国ノグチ財団理事の書簡のコピーを読み上げ、「財団は大学当局の移築案に反対すると明確にいっているではないか」と問うたところ、なんとそれは正式な手紙ではなく個人の見解だとの答えが返ってきた。私はさらに、「大学が個人的見解だと財団に返信したので、そうではない。財団の理事会の正式見解だと返答してきたのが今読み上げたものなのだ」というと、理事は返答に窮してしまった。つづいて私は理事に対して、前田答申についてはただ答申があったというだけで、その内容に一切触れないのはなぜか、とも問うた。もしこのとき理事の説明が誠実であり事実を語るものであったならば、その後の訴訟は起こらなかったかもしれない。

松村氏が読み上げた書面は、前に提示したシャピロ理事長の書簡であり、個人の見解とした個人とはサダオ氏を指し、これが事実に反していることは明らかであり、すぐに理解できよう。

法学部[★29]や文学部における説明会も上記する経済学部のそれと大きな違

いはなく相当に批判な意見が続出し、「移築は、彫刻家、建築家らの専門家のアドバイスに基づき、文化的、歴史的価値を損なわない」との発言に批判があいついだ。

こうして萬來舎現地保存の動きは、「ノグチ・ルームの保存を求める会」の参加者を中心に、慶應義塾が「新萬來舎と称される建物及びイサム・ノグチ作の《無》《学生》と題する彫刻2点および庭園を解体・移設する工事をしてはならない」とする、著作物の同一性保持権及び同一性享受権等に基づく解体・移設工事差止めを求める仮処分申請を、2003年3月21日に、東京地裁に申し立てることになる。これに先立ち、「保存を求める会」は、塾長に対し保存策の再考を求める要望書（3月7日付・資料8）を送っているが、3月11日に塾長名で出された回答では、相変わらず「萬來舎の文化的意義の低下に繋がるような移築ではない」ように十分配慮されたものであるなどと述べている。驚くことに「現状保存を要望される」「サダオ理事は新校舎建設敷地とオーバーラップしない部分をご希望でしたが、その部分には萬來舎入り口、螺旋階段、ノグチルームに面していない庭園は含まれませんので、これらの保存は出来ないことになります。今回の移設部分は、それらをすべて含み、文化財の保存という立場からも十分な移築と考えています」と詭弁とも聞こえる回答を示すのである。ノグチの作品の芸術的特徴を知りつくし、同時に文化財の保存の精神に基づき現地での保存の方策についての再考要求に対する回答にしてはあまりにも不見識であり、身勝手な解釈と言わざるをえない。サイト・スペシフィクな構造をもつ芸術であるノグチの作品を出来得る限りのぎりぎりのところで、その芸術性を保つように残さなくてはならないという専門家たちの要望の真意をほとんど理解しようとしてはないのである。文化財保護行政の専門家である西川杏太郎氏も、「保存WG」の意見交換会で、「大地に根をおろすようなモニュメンタルな文化財は、そこに存在することで、まず意味がある」、「さいわい、計画案では新校舎の敷地に第二研究室の北西側の部分がかかっているだけのようで、そうであれば、ノグチ・ルームの部分だけでも現状のまま残し、新校舎との接合部分の違和感は設計者の技量によってうまく処理すれば、新校舎の建設と文化財の保存の両立が可能である」と自説を披歴された。この意見交換会には、吉田理事も同席されていたはずだが、これに関しての協議や十分な検討がなされたかは伝えられていない。

「保存を求める会」からは、再要望書（2003年3月15日・資料10）が提出され、前記の西川発言もそこに引用された、再要望書をだしたのは、前の要望書に対する回答（2003年3月11日・資料9）に「貴殿らからの要望書には仮処分申請に言及されておりますが、貴殿らにはその適格はないものと考えます」とあったことに対する遺憾の表明と、義塾当局との話し合いの席の設定に関しては、それが建設的な意見交換や協議の場となるなら、進んで塾長らとの会見に応じたいとの意向を伝えるためであった。ただし、それがメンバーに対する一方的な説得の場となるなら、むしろ法の場での

応答を選択する旨を付け加えている。「保存を求める会」のこうした姿勢に対して、理事らは、それを「新校舎三階テラス部分見の移築を前提にした」意見交換であるとし、その会見を避けたにも拘らず、義塾の最高決定機関である評議員会の席上、評議員からの「萬來舎問題」に関しての質問に対し、当局の会見の申し入れに、メンバーたちは「設計図の変更がないなら会わない」と拒否されていると回答したと、質問した評議員が伝えている。この態度や発言の非一貫性をどのように解釈すればよいのであろう。同年3月に開催された評議員会では、保存の重要性やそれに対する慎重審議を求める意見が、伊藤淳二、大山道廣の二評議員から出されとことが知られている。

このような状況のなかで、ニューヨーク・ノグチ財団の理事長であるシャピロ氏から、むろん個人ではなく、財団の総意として、安西塾長宛てに書簡（資料11）が送られ、重ねて「ノグチが新萬來舎のために特別に確固たる場所を選んで創作したサイト型の部屋と庭園の移動改造は、作家の意図を著しく毀損するだけでなく、過去50年間に日本のみならず世界中で認められた20世紀を代表する芸術作品に取り返しのつかない破損を来すことになると、当理事会は強く感じている」と、その見解を述べ、「ノグチの芸術遺産の保存保護に対する法的および道徳的責任を負う当財団は、貴殿らの申し出のある移築案を承認することは出来ない」とした上で、「新萬來舎を現在の場所にそのまま残す方法を考え出し」、「一流大学のキャンパスライフにおける芸術性および創造性へのノグチの極めて貴重な貢献に対し、敬意を払い保護することの出来る方策を、貴塾が必ずや見出すものと、当財団は確信している」と結ぶ。ニューヨーク・ノグチ財団がこの手紙を認めた、同日の2003年3月21日に「保存を求める会」の中から義塾の教員11名と、ニューヨーク・ノグチ財団が原告（債権者）となり、東京地裁に前述した、仮処分申請の申し立てをした。

慶應義塾は2003年4月1日、担当責任者の吉田和夫常任理事をニューヨークに派遣し、ニューヨークのノグチ財団との折衝に当たらせたが、吉田教授の提示する改訂案についても反対の立場が取られ、財団の説得は不調に終わった。筆者は、いささか人が悪いかと考えたが、吉田理事の発言に対する些かの不信感があったので、シャピロ理事長に同日の会談の結果を、書面で塾長に伝えるように頼んだ。安西塾長に財団の見解を正確に伝えたいと考えたためである。シャピロ理事長の書簡（資料12）の内容は、すでに繰り返すこともないだろうが、「萬來舎とそれに隣接した彫刻と庭園は位置が独自性をもつサイトスペシフィクの作品を構成しており、それが移動されるならその芸術性を傷つけ破壊されることになる」ことを再度強調している。同席した財団の理事の話しでは、吉田理事は、義塾の解体・移設案を提示し説明を繰り返し、「ご理解して頂けたでしょう」というばかりで、財団が望む協議をする気配もなく、何のためにニューヨークまで来たのか理解に苦しむと感じるものであったということだ。

仮処分の裁判では、合計4回の審尋があり、原告側からは弁護士のほか筆者らを含め教員が出席した。この裁判（平成15年「ヨ」第22031号　著作権仮処分命令申立事件）の結果（決定）は、2003年6月11日出され、債権者の申立ては却下された。原告側の敗訴である。理由は、ノグチ財団も教員も訴える権利をもたないとするものであった。日本では建築や美術作品に対する著作権が未だ確立されておらず、裁判の事例も極めてすくない。それは審尋を通して裁判官とのやり取りのなかで感じ取ることが出来た。それ故とは必ずしも思えないが、建築や美術に関する著作権の判断を議論し、云々する以前の入り口のところで、訴えを却下し、いわゆる門前払いにしたのである。しかし、思わぬ重要な裁判所の判断を引き出すことが出来たのである。

すなわち、「仮処分命令申立事件の決定通知」のなかで、裁判所は、「本件工事は、ノグチ・ルーム及び『無』と題する彫刻を含めた庭園の現状をできる限り維持した形でこれを移設しようとするものであるが、本件建物全体についてその形状が改変されるのはもちろんのこと、本件建物を特徴付ける部分であるノグチ・ルームについて製作者の意図とする特徴を一部損なう結果を生じ、庭園についても周囲の土地の形状等をも考慮に入れた上での制作者の意図が失われたものであるから、ノグチ・ルームを含めた本件建物全体と『無』と題する彫刻を含めた庭園とが一体となった建築の著作物が、本件工事により改変され、著作物として同一性を損なう結果とならざるを得ない」（決定通知45頁）。つまり、ノグチ・ルームは、移築すれば芸術作品としての同一性が保持出来なくなると言いきっているのである。これは今後の慶應義塾の移築計画、また仮に強引にそれが実行された場合でもさまざまな問題を派生し、ノグチ作品のようなサイト型の造形芸術に対する取り扱いや保存の問題に関する議論が、今後とも様々な場所で引き続け行われ続けられるためのいわば端緒を開く結果をもたらしたといえるだろう★30。

裁判所によるこの決定を受け、慶應義塾は直ちに萬來舎の解体作業に入り、2003年9月には、知的財産権や著作権を専門とする法学部の君嶋祐子助教授をニューヨークのノグチ財団に派遣し、義塾の萬來舎解体の法的正当性を説明し、財団の了承を取り付けようとした。しかし、ここでも協議のなされることを期待していた財団側は裏切られ、君嶋助教授の来訪の意図すら理解出来ないまま、失望することを避けることが出来なかったようだ（資料13）。

移築を目的とする解体は始められ、2003年7月9日、ニューヨーク．イサム・ノグチ財団は記者発表（資料14）をニューヨークで行い、シャピロ理事長は、「大学に対し如何なる形にせよ新萬來舎を変えることは作品自体を破壊するという立場を繰り返し明言してきた」が、ついに「20世紀日本文化史上画期的な作品と長らく認められて来たこの作品」を解体したことに遺憾の意を表明している。また、サダオ理事は「学生たちに創作努力への

尊敬心を養う機関である大学が公衆の信頼を裏切った」とコメントした。2003年7月25日、NEW YORK TIMES（Arts & Culture News Desk）は、これを報道している。一方、慶應義塾は、読売アメリカ社の取材に対し、相変わらず「ノグチ作品の美術的・文化的重要性を十分認識しており、移設にあたっては、出来るだけ当初の姿に復元する」、「計画段階からイサム・ノグチ財団には何度も計画を説明し、理事のうち数人は賛同を表明していた。今回、移設に反対するメンバーの方からこのようなコメントが出されたことは残念」と答え、さらに「文化財の修復・復元を数多く手がけている文化財建造物保存技術協会の指導の下、自由学園明日館（フランク・ロイド・ライト作品）の修復工事を担当した大成建設の施工によることも決まっている」と語っている。慶應義塾当局の担当責任者が、事実を相当に歪め、自分本位な解釈を強弁していることは、この“SECTION 2 THE YOMIURI SHINBUN SATELLE EDITION” 847（2003年7月18日）でも容易に理解出来よう。文化財建造物保存技術協会（文建協）は、国宝・重要文化財の修復に実績がある。ところが、その解体作業はまことに杜撰なもので、彫刻『無』の修理のための調査にあたっていた武蔵野美術大学の黒川教授が、作品に大きな破損をきたす破壊に近い解体が行われているのを偶然発見し、義塾に急遽中止を申し入れる程であった。前述の篠田義男前日本建築家協会保存問題委員長も同じ状況を体験した。

これを知った慶應義塾美術品管理運用委員会は、直ちに関場武委員長名で、吉田理事に対し所見を送り、善処を求めたとのことである。まずこの委員会が7月に3回にわたる臨時委員会を開催した結果、《無》《若い人》《学生》の屋外彫刻作品3点とともに、談話室（ノグチ・ルーム）内装を構成する各部材とその配置、外装のサッシ、室内の設置家具、および西側庭園がノグチの環境デザイン作品であると判断し、それらが美術品であること、あわせて、萬來舎玄関部のノグチ・ルーム入口部分の大谷石積みの壁面（ノグチ構想によるニッチ付き）とレンガタイル床も谷口吉郎の協力（大谷石積み）を得たノグチ作品と判断する、としたうえで、四点の見解と要望をあげたと聞く。第一に、3点の屋外彫刻作品について、美術品としての修復保存処置を講ずることを承認し、修復保存のために慶應義塾管財部の依託した黒川弘毅氏（武蔵野美大教授）が適格な技術者であり、同氏の提出した作業計画書（2003年7月）はきわめて信頼にたる内容で、作業内容や工程にも問題は認められないとの見解。第二に、ノグチ・ルーム解体移設について初めて7月17日に大成建設株式会社、および財団法人文化財建造物保存技術協会（文建協）の担当者から報告を受けたが、その結果、両者の協力にもとづいて作成されるべき作業計画、作業内容、実施手続きに関して、重篤な不備のあったことが判明した、たとえば、大成建設建築技術部による計画策定の経緯は不明確で、6月末より進展した実施作業では、計画が不備なままに現場の判断に依存し、それも文化財の保存に習熟していない担当者に一任して作業が行われたとみられること、そのために「部材の破

損などの事故が生じたときには発注者と協議する」と明記した大成建設社「ノグチルーム移設計画書」(2002年秋) 所載の「工事要領」に違反する事態も生じており、こうした状況下で、すでにノグチ・ルームの解体に関し、ほとんどの作業が終了してしまったことは、取り返しのつかない非常に遺憾な状態であるとの指摘。第三に、美術品管理運用委員会は、ノグチ・ルームの室内デザイン各部材・パーツの保存、修復、移設にあたって、大成建設と文建協両者のより緊密な協力体制によって作業計画を見直し、細心の注意をもって、文化財の取扱いにふさわしい作業を実施することを切に要望し、とくに監修者として作業を指導・助言すべき文化財保存の専門業者である文建協には、より一層の協力を求め、以後の詳細な修復計画の開示を希望したこと。第四に、ノグチ・ルーム解体作業時における問題点として、とくに南側壁面のテラコッタ・タイルを指摘し、これが東洋と西洋の感性を融合するノグチ・ルームの室内デザインにとって不可欠な構成要素であり、個々のタイル表面に施されたスクラッチ装飾文は、ノグチ自身の手によってなされた可能性が高いのだが、それにもかかわらず、解体作業で多くのタイルが損傷・破損を被ったことは看過しえないこと。修復処置の実施にあたって、著作権者の同意・助言が必要になるケースでもあり、一刻もはやく、将来の修復作業の基礎資料として、専門家による精密な現状記録写真を作成し、タイル自体は二次的事故の危険予防のため安全な場所に保管すべきであるとの指摘がなされている。

以上を要するに、施主が保存すべき作品に対する十分な認識を持たず、また専門家を介さずに手続きの上だけで監修業務を学外に依頼した結果として生じた重大な問題とみなしてよい。

4．保存計画の現在と今後の問題

この間も義塾は、広報を通じて「出来る限り忠実に復元するので、芸術性は継承される」と主張し続けた。

ニューヨーク・ノグチ財団は、慶應義塾の萬來舎のこの解体によって、イサム・ノグチと谷口吉郎とのコラボレーションの賜物であり、ノグチのサイト指定型の特徴を持つ芸術作品は破壊されたものと判断した。建設工事の進む中、慶應義塾は2004年7月27日、黒田昌裕常任理事をニューヨークに遣り、ニューヨーク・ノグチ財団との協議に臨んだ。財団は従前の経緯を踏まえ、サイト・スペシフィックな特徴をもつノグチの芸術作品は消滅したのだから、もはやノグチ・ルームは存在しえない、今後ノグチ・ルームの名を使ってはならない。残されたノグチによる彫刻、家具などを、単品の作品 (independent work) として使用すること、すなわち、慶應義塾が作ろうとしている建物の中にそれらを陳列することまではもはや拒まないが、しかし、ノグチ・ルームで使用された家具、壁、床、天井、暖炉、窓枠、螺旋階段などを、ノグチと谷口がコラボレートして創り上げられた室内および室外の意匠と類似した姿でそれを表わすことは、決して許可し

ない。そして、建物の内装も外観もノグチ・ルームのそれと全く異なる新しいデザインで作ることを条件にこれを了解する旨を申し出た。黒田理事は、ノグチ財団の要求を受け、一部にノグチの作品を使うものの新校舎3階テラス部分には、従来の萬來舎とは異なる新しいデザインによる設計を考えることを了承し、東京に持ち帰って検討することとした★31(資料15)。

ノグチ財団は、慶應義塾とはじめてまともに協議することが出来たことを満足に思ったが、ことはそれほど単純に解決したわけではない。2004年8月3日、谷口吉郎の門下生である建築家を中心とした保存要望のグループが、黒田理事と面談の席で、理事から「ニューヨークのノグチ財団から新校舎の三階に萬來舎という建物を作ることに反対はなかった」との発言があり、また、理事が「新校舎3階に慶應義塾が建設しようとする萬來舎という建物が萬來舎の保存であるという計画に保存関係者の反対はなかった」★32と発言されたので、出席者から「そのような事実は無いことが改めて表明される」など、理事の「不可解、不明瞭、不誠実な対応」として、出席者のなかに不信の念が生じた（資料16、17)。

慶應義塾は、吉田和夫、仙田満、黒川弘毅、隈研吾、三宅理一、池田靖史、紺野美英、矢ノ目優、中内泰男、市川隆尚ら10名の諸氏による萬來舎保存検討のための専門家委員会を組織し、ノグチ財団の承認を得るための建築案を検討することになった。その結果、隈教授が3階テラス部分の建物の設計を担当し、三宅教授の推薦で庭園部分についてはフランスの建築家ミシェル・デヴィーニュ氏がこれにあたることになった。隈教授の新しい設計案で目立つところは、二階部分の床を抜き、つまり一階の天井を外し、吹き抜けにしそこにメッシュを下げるデザインになっているが、しかし、家具、テラコッタ壁、暖炉などはほぼ同じ位置にあるようだ。この問題点に関しては、すでに定められた紙数が過ぎているので、ここでは言及できない。更なる調査を重ね稿を改め述べてみたい。また、隈教授の設計案に関しては、別論文に触れるところもあるかとも思う。

しかし、移設にあたっては、「出来る限り物理的に当初の姿に復元する」と、義塾は明言しており、前の裁判所の判断（傍論）でも「いったん建物などを解体したうえで、建物の一部、庭園、彫刻を現在の位置関係や方向性などを可能な限り復元した状態で新校舎3階に移築する工事である」と認定し、「この工事がノグチ氏らの意図をできる限り保存する方法を取っていることから、著作権法60条ただし書きにいう『当該著作者の意を害しないと認められる場合』に当たり、この点でも改変が許容される場合に当たる」としており、それに従えば、慶應義塾は「出来る限り保存する方法を取る」必要がある。しかし、移築によっては、作品（著作物）の同一性は保持出来なくなるのである。裁判所の法律的見解、ニューヨーク・ノグチ財団の主張、どちらを取ろうとしても、義塾のいう「復元」は不可能であり、また万一、可能な限り当初の姿に復元をすれば、そこに新たに複製権の問題が生じてしまい、ノグチ財団や谷口吉郎の著作権継承者からの許可が必要に

なるケースも十分に考えられる。そこで、外から見ると谷口の新萬來舎の一部が、中に入ると以前の談話室（ノグチ・ルームと呼んでおこうか）と似ているが少し変わった感じを味わうというまことに欺瞞に満ちた（有り体に言う「二枚舌的な」）建物が出来上がってしまうのではないかと恐れるのである。それにしても隈教授は、まことに重い責任を負ったものだが、隈教授の建築家としての手腕に期待したいところである。ニューヨーク・ノグチ財団の要請に基づく隈教授らの起用は、当初の義塾案からすると大幅な計画変更ないしは方向転換である。まだ行われていないならすみやかに理事会に資し、評議員会に報告するとともに義塾の教職員・学生にその決定と経過を開示しなくてはならない。

ともあれ、慶應義塾は大きな問題を抱えてしまったように思われる。いわゆる「萬來舎問題」は、芸術論のほか、建築や美術に関る知的財産権、著作権を含めて論議されるなかで、今後とも常に、さまざまな形で取り上げられることに違いなく、杉山真一弁護士が述べられるように[★33]、文化財的価値をもつ建造物および美術品をめぐっての今回の「司法の判断が示した枠組みを基準としつつ、今後の議論の集積をまつことになるだろう」が、その度ごとに慶應義塾のとった萬來舎解体、移築の判断は今後も問われ続けるだろう。

ことは日本近代建築、モダニズム建築の保存の在り方が問われているのである。「モダニズム建築は残す手がかりがない」と述べた村松貞次郎教授の説は、すでに風化しようとしている。いまや建築を空間だけで捉えるのでなく、時間軸や時間の記憶というもので捉えることの重要性が指摘されている。地霊という考え方もある。近代建築を保存する「明治村」を作った、谷口吉郎教授も帝国ホテルの明治村への移築を自ら失敗であると認め、自戒の念を込めて晩年周囲人に語っている。そこには大きな政治的な圧力があったのだ。

日本近代建築の「何を」を「どのように」残すかが、今後議論となるところである。その意味で今回の「新萬來舎／ノグチ・ルーム」の保存方法の在り方を問うことは、のちに続く人たちの研究の課題として、まさに格好の教材である。そうした思いに至るとき、「新萬來舎の保存」の問題を考える建築家たちを主とする会合で、隈教授の設計案が示された後、「アドバイザリー委員会」の委員であり、また「保存問題検討委員会」のメンバーである仙田満教授に対して、谷口吉郎研究室OB会世話人の青木志郎東京工業大学名誉教授が、「仙田さん、あなたは、建築学会の会長として学会の改革など立派な仕事をした人だ。慶應義塾のなかでも発言が出来るのだ。第一、現在も建築に携わる学生を育てる教育者としての重要な立場にある。建築というものがどんなものであるか、学生に範を示すようなすばらしい案を考えて、仙田さん名を残しなさいよ」、「教育者としての名を取りなさい」と諄々と説かれたのが筆者には、特に印象的だった。

慶應義塾は、「過去の記憶とともに、未来の記憶にも責任を持たなくては

ならない」と言明している。果たして慶應義塾のいう「未来の記憶」とは一体何であろうか。

「萬來舎問題」はまだ終わってはいないのである。

註

☆1――「日本建築史を飾る慶應義塾の建物――谷口吉郎氏とイサム・ノグチ氏を中心に」、『塾』219、1999年3月。

☆2――2003年6月に解体中の旧第二研究室棟（萬來舎）を確認に来た杉山真紀子氏（故谷口吉郎・長女）に対する慶應義塾塾監局管財部職員や吉田和夫常任理事の対応、また日本建築家協会保存問題委員会前委員長の篠田義男氏の要望書に対する2003年3月11日付塾長回答をみても、筆者は、文化財の保存を主張し続ける慶應義塾が芸術作品に対するあまりの無理解さ、文化財の保存に関する意識の低さを露呈した解体作業と感じざるをえなかった。

☆3――鷲見洋一「『萬來舎問題』をめぐる若干の考察」、『慶應義塾大学アート・センター年報10』、2003年3月。

☆4――前田富士男「ノグチ・ルーム／第二研究室の保存問題――慶應義塾大学三田新校舎建設をめぐって」、『慶應義塾大学アート・センター年報10』、2003年3月。

☆5――前掲鷲見論文参照。

☆6――前掲鷲見論文、5頁以下。

☆7――前掲鷲見論文、7頁以下。

☆8――前掲前田論文、13-17頁。および「ノグチ．ルーム保存WGによる活動報告ならびに答申」（「前田報告」）の「ノグチ・ルームWG・意見交換会議事メモ」参照。

☆9――「萬來舎およびイサム・ノグチ作品保存の試み」、慶應義塾、2003年3月、1頁、5-7頁。

☆10――このいわゆる反対運動を通して筆者が、義塾当局、理事らから極く些細な一、二の事例を除いて、不当な圧力をかけられたと感じたことは無かったのは、学問の府である慶應義塾がまだ民主的に運営されていると思えたのは幸いであった。ただ、交渉を断たれる前の比較的初期の段階での吉田理事の発言には、問題とすべき理解しがたい点も少なくなかった。

☆11――前掲鷲見論文、8-9頁。鷲見氏は「プロの意見や忠告を無視した文化政策は、しょせんアマチュアの火遊びであり、ひどい火傷を負う危険がる」と述べる。および前掲前田論文、11頁、17頁。

☆12――前掲前田論文、1章から4章（12-17頁）がおおむね「前田報告」の内容に基づいている。

☆13――前掲前田論文、11頁、17頁。

☆14――前掲鷲見論文、9頁。

☆15――「旧第二研究室（新萬來舎）の保存を要望する会」、「財団法人イサム．ノグチ日本財団」、"International Committee to Preserve Shinbanraisha" 等に宛てた慶應義塾からの書簡参照。使用例がある。

☆16——地上はもとより、それが地下に深く根をおろす記念碑性がノグチの作品、とりわけ、戦没学生の鎮魂を込めて作られたとされる彫刻「無」などにあることは、ノグチの芸術を知り、また制作現場にいた建築家や彫刻家が語っている。谷口もまた地に根ざすという思想で記念碑や台座の設計をしたという。

☆17——前掲前田論文（12頁以下）によれば、保存に関わる要望は、これに先立ち、文学部美学美術史学専攻、アート・センター鷲見洋一所長、中等部吉村洪教諭らから要望や意見が義塾当局に提出された。

☆18——「保存を要望する会」の代表世話人としては、河合正朝（慶應義塾大学文学部教授）、杉山真紀子（東京芸術大学非常勤講師・文化財保存学）、千住博（日本画家・京都造形芸術大学教授）、田中亮三（慶應義塾大学名誉教授）、山岸健（慶應義塾大学名誉教授）、矢内原勝（慶應義塾大学名誉教授）の6名がこれにあたった。これには、塾員、塾教職員、学生をはじめ、学外のこれに関心を持ち賛同する人々、約2500名が署名した。

☆19——ショージ・サダオ（Shoji Sadao・財団法人イサム・ノグチ財団理事）、リチャード・ラニア（Richard Lanier・アジア文化カウンシル理事長）、マーティン・フリードマン（Martin Friedman・ウオーカー・アート・センター名誉理事）の三氏が代表となっている。

☆20——署名呼び掛け人の一人、バート・ウィンザー-タマキ（Bert Winther-Tamaki カリフォルニア大学アーバイン校助教授）は、その博士学位論文の第一章で、ノグチ・ルームにおける彫刻と環境デザイン、室内デザインの統合の問題に言及し、その重要性を論じている。ほかにこれを論じる研究に、Bruce Altshuler, NOGUCHI, Abbevill Press, 1992.　また、マナ・マリア・トーレス『イサム・ノグチ——空間の研究』、マルモ出版、2000年、などがある。

☆21——「保存のための国際委員会」の要望書（資料3）参照。

☆22——前掲「萬來舎およびイサム・ノグチ作品保存の試み」4-6頁。ここで美術にかかわるオーセンティシティの問題にも触れているが、「三田新校舎建設の計画により、改めて萬來舎の存在意義についての論議が起ったのは、継承の仕方にも問題があったと言わざるをえない」と、その 責任を前任の他者に押し付けている。そのうえで、大学院校舎建設時点でオーセンティシティが一部失われているから、解体し現状から別の場所に移築してもよいとの理屈を引き出そうしている。これこそアマチュアの組織だけで無邪気にことを進めてしまった結果で、「火遊びである」と批判されても仕方あるまい。

☆23——前掲「萬來舎およびイサム・ノグチ作品保存の試み」、4頁。「他校舎とのスケールの乖離」、「キャンパス景観からの離脱」などの項において、萬來舎の原位置での保存の不必要性を述べる。乱暴な言い方だが、これは下世話にいう「畳と女房は新しい方が良い」の喩えにも似て、新しいもの、その数が多く、一見見端も良く大きなものに揃えてこそ調和や統一性が保てると思ってしまう、実に短絡的といえる発想に留まっている。美術作品や芸術性を保持する建造物は、決して規格化された機械製品やそれを構成する部品のようなものと同一視されるべきものではないのである。また、美術におけるオーセンティシティを論じながら、

その本質的意味を理解しようとせず、安易な判断を下し、文化財の保存の上からはしごく当然のことである「催事時以外の学生の自由な出入りの制限」や、それ故に「建物脇の通路に『立入禁止』の看板が立つこと」をもって、「明らかに萬來舎の精神に反している」（千客萬來の意に反す）とする主張は、筆者には理解しかねる。いささか誤解を恐れるものの、目前の事態の収支と結果に拘泥せざるをえない営業部や営繕課の要員とは異なり、これでは、いやしくも大学に席を置く科学者の判断としては、いささか慎重さを欠くと言わざるをえないだろう。

☆24——前掲「萬來舎およびイサム・ノグチ作品保存の試み」、4-6頁。

☆25——前掲「萬來舎およびイサム・ノグチ作品保存の試み」、4-6頁。前掲前田論文、14-16頁。前田氏は、ノグチ・ルームの1階部分のみに限定したこの解体・移築とは造形的に見れば谷口とノグチとの共同制作たる建築空間に対する加害者的行為であると指摘するとともに、ノグチ・ルームのもつ東西軸のもつ重要性、庭園の大地性などの消失を上げ、それがあたかも空中庭園のようなものになると言い切っている。ほかに「デパートの屋上のお稲荷さんのようになる」と評する人の話も聞いている。

☆26——前掲「萬來舎およびイサム．ノグチ作品保存の試み」、4頁以下。

☆27——「現地保存を強く求める建築家の会」は、これに対し、「門下生は正式に誰もそのような依頼を受けてはおらず」、当然、門下生として「意見の集約」をはかるための会合をもったこともない」、「偽りである」と反論し、遺憾の意を表している。

☆28——松村高夫「慶應義塾は文化財・芸術品を破壊する大学になった——萬來舎・ノグチ・ルームの解体」、『大塚会会報』30、大塚会、2003年8月。この論文のなかで松村氏は、萬來舎および移築の意味と問題点、いわゆる「萬來舎問題」に発展する流れの経緯、東京地裁に申請した仮処分の結果、地裁の判断を踏まえて、慶應義塾が課せられた責任とその問題点などを簡潔にまとめている。

☆29——「<萬來舎ノグチ・ルームの保存を要望する会>を支援する法学部有志の会」が結成され、2003年2月10日付で、「法学部専任教員の先生方への署名のお願い」が出されている。

☆30——小泉晋弥「<萬來舎>の移転計画をめぐって」（傷ついた美術史24）、『アート・トップ』193、芸術新聞社、2003年8月、88-89頁。杉山真一「歴史的建築物の解体、移築を計画、工事は著作者人格権を侵害するか」、『日経アーキテクチュア』2004年7月26日、日本経済新聞社、2004年7月。

☆31——2004年7月27日に行われたニューヨーク・ノグチ財団と黒田理事との会談協議の場では、以下の4項目を含む要求が出されたことがサダオ氏報告されている。

On July 27th Isaac Shapiro, Richard Lanier, Hugh Hardy, Shoji Sadao and Jenny Dixon met with Mr. Kuroda of Keio University and Mr. Yamaki of Keio Academy of New York. We met again on September 23rd with Dr. Miyake of Keio and Mr. Shibayama from Taisei Construction Corp. who are the contractors on the new School of Law project. At both meetings it was agreed

that a completely new space having nothing to do with Shin Banraisha (SB) would be an acceptable compromise rather than trying to reproduce it on the 3rd floor.

On both occasions we made a tape recording of our discussions and a Draft Minutes of the Discussion was prepared for the record of the July 27th meeting. The Draft states that the following conditions were made by the Foundation for its participation on the project:

1. The new space must not be an imitation.
2. The new space must not be called the Noguchi Room.
3. The space must be an entirely new space, using some of the elements of the Noguchi Room.
4 It is technically possible to make the space virtually identical in terms of placement, lighting, columns, elevation, etc. However, the members of the Foundation stated that this would not be appropriate.

Last month with our approval, the architect Kengo Kuma who is on the architectural faculty of Keio was selected to design the new space. Mr. Kuma is known for his contemporary minimalist design of buildings, and it was hoped that he would design an appropriate new space on the 3rd floor of the School of Law building which would have little relationship to the original SB. (9/3/2004)

☆32——市川友貴「イサム・ノグチの芸術空間を残そう」、『週刊金曜日』、株式会社金曜日、2003年6月、38-39頁、に日本建築家協会保存問題委員長の小西敏正宇都宮大学教授が、大地から引き離す保存は適切でないと発言している。

☆33——前掲杉山真一論文。

（かわい　まさとも・所員、慶應義塾大学文学部教授／日本美術史）

資料集——————————

【資料１】

平成15（2003）年1月6日

慶應義塾
塾長　安西祐一郎様

社団法人　日本建築家協会（JIA）
関東甲信越支部　支部長　松原　忠策
保存問題委員会　委員長　小西　敏正

慶應義塾大学萬來舎（第二研究室）の保存についての要望書

拝啓　時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

貴塾におかれましては、我が国の繁栄と文化の高揚に大きく貢献されて崇敬の念に耐えません。また、日頃当協会の活動に格別のご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げる次第です。

私ども日本建築家協会では、優れた建築物を長く使い続けることによってこそ、文化と歴史が継承されさらなる新しい発展が実現されると考え、当委員会を中心に活動を重ねております。

この度、慶應義塾大学では現在萬來舎（第二研究室）のある位置に新築校舎を計画していると伺いました。

貴塾発展のために、高密度化した三田の敷地内の有効利用を考えられ、熟慮の末、当該敷地を候補地とされ、競技設計により建て替えの案を選択される慎重な手続きには敬意を表するものであります。

しかしながら、ご高承のとおり、「萬來舎（第二研究室）」は、文化勲章を受章した建築家谷口吉郎と、国際的活躍で知られる彫刻家　イサムノグチの創作協力によってつくられた作品です。谷口吉郎は「演説館」（明治7年、1874）にこもる意匠のモラルを、各校舎が新しく受けつぐことによって、「福澤精神」のルネッサンスを表現したいと、一方、イサムノグチは、慶應義塾の学生だけでなく、日本の全ての学生諸君がそこに来て聖域を見出して呉れるようにと望んで、これを残すといっております。

現在、我が国の都市部において、経済的な事情など様々な理由で、近代の貴重な建築遺産が次々と失われております。失われた建物に刻まれた時間の重みは二度と取り返すことができません。古いものと新しいものとの共存が今日ほど求められている時代はないと思われます。

私どもと致しましては、建築家谷口吉郎と彫刻家イサムノグチの類希なるコラボレーションの賜である萬來舎に宿るその精神性と空間のその研ぎ澄まされた繊細な魅力を後世に十分伝えられるようにさらなるご検討に英知を傾けて頂きたいと願ってやまない次第でございます。

尚、私どもと致しましてもこれまでに培った知識と経験に基づき、その魅力を存分に残し活かすために可能な限りの協力をさせて頂く用意のあることを申し添えます。

敬　具

【資料2】

From: Bert Winther-Tamaki
To: JAHF@xxx
Sent: 2003/01/12 12:18

Dear Friends,
In 2001, many of you signed a petition to support the preservation of the sculptural plaza designed by Isamu Noguchi in Costa Mesa, California. That effort was successful in improving the terms of the agreement that was finally reached between the developing company which owns the

property and the City Council of Costa Mesa. Now another important site design by Isamu Noguchi is endangered. This time the Keio University is planning to demolish the interior and adjoining sculpture garden which Noguchi created in collaboration with the architect Taniguchi Yoshiro on its campus in Tokyo in 1951. Please consider adding your name to the petition below to be submitted to the president of Keio University. Send your signature directly to sadao@noguchi.org
Shoji Sadao, Executive Director, The Isamu Noguchi Foundation, Inc.
Thank you very much.
Sincerely,
Bert Winther-Tamaki
Associate Professor Department of Art History University of California, Irvine

【資料 3】

January 7, 2003

Dear Prof. Anzai:

It has come to our attention that Keio University is seriously considering the demolition of Old Laboratory Bldg. 2 which houses the "Shinbanraisha/Noguchi Room" and the sculpture garden that is contiguous with the Noguchi Room. This facility was designed in 1951 in a collaboration between the distinguished Japanese architect, Yoshiro Taniguchi and the eminent Japanese-American sculptor, Isamu Noguchi.

May we point out that the Noguchi Room and Sculpture Garden are of tremendous art historical value having been constructed at a critical period in the development of Modern Art in Japan. Coming out of a devastating war with little to inspire or encourage their development, it was an inspiration to a whole generation of architects and artists who were only vaguely aware of the modern art movement in Europe and America. The Noguchi Room together with the contiguous garden with Noguchi's sculpture "Mu" and "Wakai Hito" is an internationally recognized masterpiece of post-war modern architecture and art in Japan.

As members of the international community concerned with the arts and its role in society we, the undersigned, support the Japanese efforts to preserve this site-specific work of art as a monument to the spirit of international cultural collaboration and respectfully urge that Keio University not destroy its own cultural heritage by demolishing or relocating this work of art.

INTERNATIONAL COMMITTEE TO PRESERVE SHINBANRAISHA
Shoji Sadao, Trustee of The Isamu Noguchi Foundation of Japan, Inc.
Richard Lanier, President of The Asian Cultural Council
Martin Friedman, Director Emeritus, The Walker Art Center

【資料4】

平成15年1月18日

「旧第二研究室（新萬来舎／イサム・ノグチルーム）の保存を要望する会」

慶應義塾
塾長　安西祐一郎

慶應義塾大学旧第二研究室（新萬来舎／イサム・ノグチルーム）の保存に関する慶應義塾の方針

拝啓　時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、慶應義塾大学萬来舎（第二研究室）の保存についてのご要望に対してご回答申し上げたいと思います。法科大学院に代表される新大学院構想を実現するために、新しい校舎の建設が三田キャンパスに必要なことはご承知のことと存じます。新大学院構想検討委員会ならびにその委員会の下に設置された法科大学院ワーキンググループの検討結果を踏まえ、新大学院環境整備委員会を前者の中に設置し、新大学院構想の実現のための新校舎の検討・計画を進めて参りました。その結果、三田キャンパスの狭隘なスペースの限界性から西校舎隣接地、現在の萬来舎の敷地を含む場所が建設地として選定され、できる限り多くの方の意見を反映して計画を進めるために慶應義塾としては初めて設計競技を行うなど、慎重に計画を進めて参りました。

設計競技において設計監理者が決定し、昨年の6月から具体的な基本計画に着手し、慶應義塾美術品管理委員会の前田教授にお世話いただき、イサム・ノグチルームとその庭園および彫刻の移設に関して多くの関係者からのヒヤリングを昨年の12月まで重ねて参りました。その間昨年の11月に、上記の計画に関しまして旧第二研究室（新萬来舎／イサム・ノグチルーム）の保存の要望が貴会から提出されました。ヒヤリングと同様貴要望も貴重で重要なご意見として参考にし、これまで基本設計に鋭意努力してまいりました。今般、ほぼ基本設計を終了することができましたので、旧第二研究室（新萬来舎／イサム・ノグチルーム）の保存に関する慶應義塾の考え方についてご回答申し上げます。

これらイサム・ノグチルームとその庭園に関しましては、その空間と精神性を継承するために、一貫して保存する立場を慶應義塾は貫いて来ております。このことは、設計競技の段階から、要綱にノグチルームの保存を条

件にしておりましたことと、ノグチルームとその庭園および彫刻の保存に関しましてこれらの製作に関わった彫刻家、建築家、美術家など多くの専門家のご意見を拝聴し、これまで設計に生かしてまいりましたことから、ご理解いただけると考えております。慶應義塾大学三田キャンパスの狭隘なスペースの限界性から現状保存できないことは誠に遺憾ではございますが、ノグチルームとその庭園および彫刻をできる限り現状の状態でかつ方位および彫刻との位置関係を忠実に再現して、新しい三田新校舎3階の屋上庭園に面する場所に移設することによって、先に述べました通り建築家谷口吉郎と彫刻家イサムノグチのコラボレーションの空間と精神性の継承を行いたいと考えております。また、イサムノグチの彫刻「MU（無）」の製作に携わった関係者の中には、彫刻MUの円相の中に西方の落日がしっかりと浮かび上がるというイサムノグチのオリジナルのモチーフを回復できることになると喜んでおられる方もおり、よりオリジナルなモチーフに復元できる面もあるとも考えております。

一方、日本の戦後の厳しい時代におけるモダニズム建築の代表作としての旧第二研究室の空間と精神性の継承の問題が残ります。これにつきましては、谷口吉郎門下生のご助言を仰ぎ、ノグチルームに隣接する螺旋階段とその周辺の建築物を保存・移設して、縦窓など特徴あるファザードを保存することによって、第二研究室のシンボル的な空間とその精神性を保存したいと考えております。

このような総合的な施策によって、歴史的な空間と精神性の継承を行うとともに谷口吉郎とイサムノグチのオリジナルなモチーフをできる限り再現して、新たな時代に慶應義塾の発展を目指すものであり、ご理解いただければ幸いでございます。

敬　具

【資料5】

慶應義塾大学塾長
安西祐一郎殿

拝啓　新緑の候、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

貴慶應義塾大学が将来構想に基づく法科大学院の実現に向けて、教育理念を追求しておられることに心から敬意を表するものであります。

貴塾がその校舎の設計案を求めるに当たり、敷地内にある萬來舎の庭園、彫刻などを文化財として、保存に配慮することを条件にされたと伺いました。建物を解体し、その跡地を緑地としてノグチ・ルームおよび彫刻は新校舎に移築する案を採択され、萬來舎にとって重要な基本的部分については移設するので、そこに求められた精神性や文化的意義は十分に保持されたと説明しておられると仄聞しております。

しかし私たちは萬來舎とその空間を生み出した建築家・谷口吉郎と彫刻家・イサム・ノグチの設計・制作の基盤となる思惟を計り、演説館と萬來舎

の緊張ある空間の現状を維持し、再整備と活性化を求めるものであります。

谷口によれば、“ノグチと作家的友情によって二人の協力は想像以上に進められた。それは当初からそれぞれの作品を大地の上に直接おくことを相互に確認しつつ作業をすることが出来たからであった”ということでありました。谷口は福澤イズムを象徴する演説館に深く感銘を受けたことを自稿に詳述しています。そして演説館の建つ稲荷山と北西に延びる大地の先端部（プロミネントスパー）という独得の地形が、萬來舎の設計の建築的・造形的諸元を厳しく規範したと語っております。この大地のスパーのもつ特殊性から、ノグチが谷口に向かって“東洋のアクロポリスだ”と叫び、両者の創作意欲を一層昂めたのでした。

萬來舎は演説館と至近になければならぬ。そしてその建物の東方から西方の地の彼方まで、来訪者の視線を談話室を間において見透かす、また建物の北方から演説館を見通す。それによって演説館とともに萬來舎と大地を一体化させることが、福澤精神の発揚にとって最も必要である。そう語る谷口は、「彫刻家プラス設計家」としてのノグチとの協力、その「庭園」と「彫刻」が自らの建築にとっても絶対に不可欠であり、またその位置でなければならなかったのであります。

萬來舎を大学らしい学究と思索の場所としたいことから「彫刻と建築の結合」によって、造形的機能を発揮せしめることを希い、同時に演説館との関連を明らかにするために、談話室を演説館の至近に配置しました。そして大地の自然条件を生かしつつ、建物を強く印象づけるように平面を緩やかに屈曲させて、演説館への視線誘導の役割を持たせました。演説館の建つ位置と規模および海鼠壁の意匠から、建物を2階建てとし、その階高と矩計、立面の全長および窓の寸法、位置が厳密に定められたのであります。さらに、談話室東側の玄関に4本の柱を独立させて来訪する若き学生らにパルテノンの柱の精神性を感得させ、思索と団欒を呼びかけたのでした。大学の1日の終わりにこの場所に集い、関東平野の西に沈む夕日を眺めながら、先生と学生とが「暖炉」を囲み、語りあう場として、世界に開かれた教育の場として福澤精神を体現することを意図しています。この談話室から西方の庭園に対する視線を期待したことは、どの来訪者にも明らかに伝わるはずであります。

「現在の大学院校舎が建ったために、この地域の建築の空間的バランスが、谷口が萬來舎を設計した当時から大きく崩れた。それ故に萬來舎を撤去してもよい」というのは解体の理由にはなりません。そして談話室とノグチの庭園は、両設計者の意図された“大学らしい学究と思索の場所となることを望んだ”真意に憶いを致し談話室のあり方、庭園の性格と彫刻、さらに訪れた人たちの視線、利用のされ方など、その考え方自体を、今一度改めて思い返す必要があると判断いたします。

先にも延べた通り、貴塾が設計案を求められる条件として、現存する歴史的建造物について留意されることを要望されたことを私たちは高く評価

しております。確かに谷口・ノグチ作品は、わが国の文化史にとって、そのコラボレーションを具体化するための両者の意識の高さ、激しさは、近・現代の世界の実例においても稀有である、といっても過言ではありません。現状をそのまま整備されるならば、作品的価値と貴塾の趣旨とされる教育上の効果は将来無限に拡がることでありましょう。

残念ながら現設計案は歴史的に貴重な遺産の一部を形骸として残すに留め、技術一辺倒に建造物を残そうとした20世紀型に属するものであります。21世紀の社会を導く立場の慶應義塾大学として、萬來舎を原形のまま残し、整備することを関係者全員が心の問題として捉え、考えるべきであると思料されます。21世紀はまさに心が問われ、環境意識が問われる世紀であります。

空中庭園とノグチ・ルームを併立させる現設計案は、谷口・ノグチの萬來舎にかけた慶應義塾大学の遠い将来に期待した憶いを断つだけでなく、わが国の近・現代の建築と彫刻の総合作品として日本近代建築史上の類い稀な文化財を滅失させ、また演説館の存在意義を減ずることにもつながります。

私たちは萬來舎の将来のあり方に対するノグチ・ルーム保存WGによる2002年12月12日の活動報告ならびに答申を拝見いたしました。そして真摯な、かつ高い識見を知ることができました。現設計案は基本的な考え方を厳密に再考するならば、必ずしも敢えて萬來舎を撤去せずとも現設計案と共生させて、創建当初の姿と精神性を再現できるであろうと考えられます。

夕陽を望みながら、地球の悠久の時間に想いを致し、世界人類の将来を考える空間として、演説館と共に大地に立つ萬來舎が形成する空間の現代的意義を考えるべきであります。萬來舎は庭園、彫刻とともに記憶の装置であり、念いの碑でもあります。塾を訪れる多くの塾友の思い出の場として、学生たちの未来の思い出の場としてこの空間は百年後に重要な役割を果たすことになると確信致します。

わが国の後世に齎す幸いのためにも慶應義塾大学が格段の勇気をもって現案を再検討し、谷口とノグチが設計した萬來舎、庭園、彫刻を創建当初の姿に整備・活用する決断をされることを期待します。

敬　具

平成15（2003）年5月6日

谷口吉郎先生の「萬來舎」の21世紀の意義を問う会
世話人代表　青木志郎

【資料6】

慶應義塾の「萬來舎」の現地保存を強く求める

慶應義塾の「萬來舎」の現地保存を強く求める建築家の会
代表　東京工業大学名誉教授　青木　志郎

1　趣旨

我々建築家は、萬來舎及びその庭園、彫刻（以下総称して萬來舎という）を世界に誇る、優れた作品であると評価し、現在の位置において創建時の姿に回復し、整備することを慶應義塾に強く要求する。

我々は、建築の設計、建築・都市環境関係・文化財の保存等の設計者・計画者・研究者・教育者として、国内外の第一線で活動を続ける建築家の集団である。

2　現地保存を要求する理由

(1)　萬來舎はひとり慶應義塾のためにのみに留まらず、いまや広く一般の市民に開放することが強く求められており、地域の、またわが国の今後の文化の発展に資するためにも一層存在意義を深めつつある。

第二次世界大戦後の経済的・技術的に困難を極めていた昭和20年代に創出された萬來舎の意匠は、50余年を経た現在、歴史的な見地から文化財的価値を増して、重要な国民的財産になってきた。それ故、今後一層、それらの機能を完全ならしめるために、現地で保存・整備されることが強く要請されるのである。

(2)　谷口は演説館に強く福沢イズムを発見し、感動した。そして演説館が稲荷山に建つその位置と、設計予定地の特殊な地形を関連させ、大地の力と、ノグチの太陽の光に対する憶いの力をかりて空間を具現化し、そこに集う学究・学徒に強く福沢精神を体得させる事を設計のモティーフとした。この事実の重要さに大成建設の設計案は考えが至らず、空中庭園に一部を移すから目的は満足できると断定している。谷口の建築が創り出す意匠の特徴は、建築の矩計と桁行長さとの比例関係にある。谷口はそれから窓の寸法を定めて連窓とし、ファサードを緊張させるのである。そこに現れた独特の美しさが、常に訪れる人々の心を打つ。この谷口特有の意匠心は、萬來舎にも遺憾なく発揮されているのである。東側の立面は4本の柱を演説館に寄せて独立させ、抑揚をつけつつ北側の立面に連続させた。建物の高さに対して伸びるこのかたちは谷口の意匠心の本質をよく顕わすものであり、必ず再現させねばならない。

ノグチ・ルームと西側立面のみを残そうとするのは谷口の心にあった建築の本質を破棄し去ることである。それ故新校舎屋上に一部を移設する計画は重大な誤りであり、作品を冒涜するものであると言わざるをえず、我々は絶対に許容することができない。谷口の考え方をあらためて認識し直し、現在の計画案を変更すべきである。

(3)　斯界の専門家が、その立場から演説館と大地との関連、三田山上の他の価値ある既存建物との関連において萬來舎の精神性と造形性を高く評価し、現地に存在させなければ、その意義・価値は消滅すると提言しつづけて来た。しかし造型物の制作や思想の追及について専門外の者が、根拠を示して評価し翻意を促す専門家たちの塾のための意見を無視して、空中庭園に移設するから、谷口の思想・福沢の精神性が完全に残ると、

強く主張する根拠は何処にあるか。専門家は言うに及ばず現地保存を求める市民にも納得できる充分な説明があるべきであろう。

(4) 貴塾は近い将来建築専門コースを設立すると仄聞している。建築教育の場において、演説館と一体化した精神・空間を持つ近代建築史上重要な作品である萬來舎の現地における存在は、建築学を学ぶ学徒にとって優れた教材であり、掛替えの無い建築教育の環境となる。現地で保存・整備された萬來舎が持つ教育的意義は限りなく重い。

私立大学の中でも優れた歴史と伝統を持つ貴塾が、この重要な文化財を滅失させようとするのは如何なる教育理念に基づくのか、特に建築学教育の理念が後世にわたり強く問われるであろう。

3 その他の問題点

(1) 演説館と萬來舎は空間的に視覚的に結合し新しい美をキャンパスに加えた。その30年後大学院校舎が建築された。設計した建築家は演説館と萬來舎の空間の重要性を正しく認識し、慎重に萬來舎との間合いをはかって、校舎の配置を決めた。萬來舎が北側から見て左へ折れ、凹状の空間を造っているのに呼応して、向かい合う立面を丸め、凸状にしたのである。こうしてここに三つの建築が個々の美を競いながら、さらに相互の空間の緊張をたかめ、芸術的環境が創造されたのであった。三田山上のこの限られた場所でなおこのように慶応義塾が福沢イズムを受け継ぎ、キャンパスの歴史に、時代に先んじて次々と新しい価値を創造付加していったことを我々は評価し、尊敬の念を抱いてきたのであった。しかしノグチ・ルーム WG 第5回意見交換会 議事メモにある「大学院校舎が建設された段階で東側庭園は無くなり『若い人』も移設され、空間的に大学院校舎が演説館を圧迫する結果となってしまった。私*としてはこの時点でイサム・ノグチが構想した空間デザインは失われてしまったと考えている。」との発言があるが、それは大きな間違いである。(*吉田和夫常任理事 ノグチ・ルームWG 第5回意見交換会 議事メモ)

(2) 2003年2月20日付「新萬來舎保存のための国際委員会」代表 ショージ・サダオ氏宛書状には「故谷口吉郎氏の生徒に連絡をとり正式に相談を依頼いたしました——」とある。しかし谷口門下は「門下生として正式に」誰もそのような依頼をうけてはおらず、当然、門下生として意見の集約をはかるための会合をもったことはない。この書状の謂いは偽りであって、極めて遺憾である。

4 現計画の変更されるべき資として、以下我々の谷口・ノグチの作品に対する評価その他を列記する。

(1) 萬來舎は谷口吉郎の代表作である。

福沢諭吉によって建てられた演説館に谷口は「造形的な意匠は様式黎明期における一種の倫理観に強い素朴美さえ発見」し演説館の造型から感得したものを、萬來舎の設計の基本理念とした。

また、建築環境をコンテキストとしてみる通念のなかった1940年代—

戦後の復興に追われていた時代—にすでに演説館を原点とする建築群のひとつとして萬來舎を捉え、ここを訪れる学徒・研究者に対し感ずべき環境美、景観美を創出した。

(2) 谷口がイサム・ノグチを単なる彫刻家ではなく「彫刻家」＋「設計家」として認識したことによって、両者の緊張あるコラボレーションが、世界でも稀な、秀逸な作品を生みだすことに成功した。

時代にさきがけた芸術家同士の必死のせめぎ合いの作業によって生み出された、優れた作例である。

(3) 三田キャンパス内における谷口の建築像

旧図書館（曽禰・中条設計）と演説館は重要文化財建造物である。これらの建造物は三田キャンパスにおける建築群のあるべき姿となりその環境創生の導き手になっている。谷口は「三田の環境とも調和しなければならない。山の上にはすでに曽禰達蔵博士と中条精一郎氏によって設計された図書館と塾監局がたっている・・・私はこの三田の校庭に残っている尊い建築に教えを乞うべきだと決心した」としてこれらの建造物の在り様を萬来舎設計思想の基本に据えた。このことによって義塾のキャンパス美の骨格の基礎が形成されたのである。それは後年、大学院校舎の設計者に受け継がれ、「三田の丘に『造型交響曲』を夢想」した谷口の願いに新しい「シンフォニーの一章」が加わることになった。

(4) 福沢精神の継承

福沢諭吉の建学の精神を拠り所として創作した谷口・ノグチの、演説館と周辺環境を含めた美的空間の扱いの秀逸さは個としての萬來舎のみならず、面としても評価すべきである。ここにみる意識的緊張は大地をはなれては存在し得ず、矩計を定めた演説館との間の精神性をも喪失する。

(5) 文化財の意義

建設から半世紀を経て、萬來舎は優れた作品としてその芸術性が高く評価されている。またすでに慶応義塾のみならず、いまや社会的資産として価値をたかめつつある。今後さらに一層、文化財的価値は高まることであるだろう。

(6) 教育的意義

—建築家・大学人の手紙より——「大学は新しく再生しなければならないときです。それはすべてをすてることではなく、その大学の精神とこころの拠り所は確保し、保持することが重要なはずです。お二人の芸術家の残されたこの空間はことばを越えた感銘を学園の研究者と学生に語りかけるものであります。」

【資料７】

February 13, 2003

Dear Professor Anzai:

I want to thank you again for hosting such a pleasant lunch when Shoji

Sadao, Tom Messer and I were in Tokyo in November.

At the most recent meeting of the Board of Trustees of The Isamu Noguchi Foundation here in New York, we discussed the fact that Keio was considering the possibility of demolishing Old Laboratory Building 2, on the ground floor of which is located the "Shinbanraisha/Noguchi Room" and sculpture garden designed by Isamu Noguchi in collaboration with Yoshiro Taniguchi. I am writing you now to share some of the thoughts that my fellow board members and I have since had on that subject.

As you may recall, when Messrs. Sadao, Messer and I were at Keio, Mr. Yoshida very kindly took us to Shinbanraisha, where we were joined by several of his colleagues who have been involved in discussions about the demolition of the old building and perhaps moving the Noguchi Room and the sculpture garden to another location in a new structure to be erected on the site.

All of us at the Isamu Noguchi Foundation are well aware of the difficulties involved in meeting the classroom and related space needs of educational institutions today, especially those such as Keio that do not have a great deal of room for physical expansion. We nevertheless believe that, while seeking to fill these needs, it is of major importance to preserve unique and historically important structures and cultural works, thereby respecting and honoring the past.

I know that you and your colleagues appreciate the enormous aesthetic, cultural and historical significance of Shinbanraisha and that you share our concern that a practical solution be found that will preserve this important cultural property and allow Isamu Noguchi's creative genius to remain a vital and inspiring part of student, academic and intellectual life on campus. It is certainly one of Keio's main cultural features and is noted throughout the world as a splendid example of the university's commitment to providing the finest and most stimulating educational environment possible.

It is our understanding that no final decision has yet been made as to precisely how Noguchi's room and adjacent garden may be incorporated into plans for the proposed new building. We at the Isamu Noguchi Foundation recommend that the situation be reviewed anew and that the most careful thought and attention be given to the development of an architectural solution that would allow the Noguchi room and garden to remain intact where they are presently located. Given the abundance of exceptionally talented architects and engineers in Japan, we are confident that an exciting and imaginative alternative can be found to

the Taisei plan so as to keep Noguchi's remarkable achievement at Keio intact and in situ, thereby preserving its artistic integrity and simultaneously bringing immense credit to Keio as an institution.

As you know, works of art that are made for particular circumstances and situations derive their real power and purpose from being perceived in the places and in the ways that their creators originally intended. This is especially true of Isamu Noguchi's work. Our board feels very strongly that moving or otherwise modifying the site-specific room and garden Noguchi created especially and exclusively for the Shinbanraisha would not only frustrate the artist's intent but would also have irreparable damage on a work that, in the course of the past five decades, has come to be internationally regarded as a milestone in the history and development of twentieth century art, not only in Japan but in the rest of the world.

Fortunately, Keio's current expansion plans offer you and your colleagues a rare chance to demonstrate that progress and preservation are not antithetical but can go hand in hand for the mutual benefit of both. Successfully combining those two elements in a single project is admittedly not easy, but it is clearly in the best interest of all concerned. For Keio, as one of the world's preeminent educational institutions, has both a special responsibility and a unique opportunity to achieve a particularly happy conclusion to such a challenge by leaving Isamu Noguchi's brilliant work of art where he conceived and located it over fifty years ago and where, thanks to your university's enlightened stewardship, it remains to this day for present and future generations to admire and enjoy.

Sincerely yours,

THE ISAMU NOGUCHI FOUNDATION, INC.

Isaac Shapiro, President

【資料8】

要望書

慶應義塾長

安西祐一郎様

予定されると聞く解体を前にして、谷口吉郎とイサム・ノグチという二つの個性の出会いから生まれたノグチルームを含む、新萬來舎の文化的価値が改めて広く認識されつつあります。とりわけ、ノグチルームとそれに付属するノグチガーデン、そしてその庭園に置かれた彫刻の総体は、「環境芸術」の先駆的な作品として再認識されつつあります。私たちは、大学院

新校舎建設が、こうした新萬來舎の文化的価値の再発見とその享受の拡がりを断ち切るものとなってはならないと考えます。

義塾は、「ノグチルームの保存」を新校舎建設にあたっての基本コンセプトの一つとして掲げてこられました。しかし、実際に採用された保存案は、「生きた鳥を殺して剥製にし、棚に飾るようだ」と評される部分「移築」案でした。それは、環境芸術の一環としてのノグチルームの真価を大きく損ない、著作権法上も違法性（著作物の同一性保持義務への違反）があることが、多くの専門家によって指摘されています。

私たちは、本来は、どうすれば新萬來舎・ノグチルームを保存したといえるのか、専門家の見解を十分に取り入れて確定した後に、その保存案を前提として設計コンペや建設計画案の選定を行うべきであったと考えます。しかし、実際にはそうした手続きが実行されないまま現行の「移築」案が決定されたのです。もちろん、現時点で私たちが求めることは、すべてのプロセスをやり直すことではありません。私たちは、これまでの新校舎建設のプロセスの進行と矛盾しない、新萬來舎・ノグチルームの実のある保存の実現を要望いたします。

新萬來舎の重要部分、とりわけ、ノグチルームやノグチガーデン、さらに建物の前面の部分を現状の位置で保存しながら新校舎の建設を行うことは、今からでも可能です。私たちは、そうした保存手法を採ることが、演説館に隣接した大地に建つ新萬來舎の空間構成に、谷口・ノグチが込めた精神性を継承するうえで最小限必要であると考えます。また、そうした手法が、歴史的建造物の保存手法の一つとして確立し、現に内外で広く用いられていることは周知の事実です。今、義塾が決断すれば開発と保存を両立させることが可能です。

義塾が現行の建設計画案の決定後に遅ればせながらも委嘱したものの、事実上「お蔵入り」させてしまった「保存ワーキング・グループ」（座長・前田富士男文学部教授）の詳細なレポート（2002年12月12日付）を始め、美術・建築の専門家によって、また、新萬來舎のあるべき保存に関しての基本理念はすでに提示されています。また、日本建築家協会も保存にあたって技術的な問題を含むアドバイスを行う用意がある旨、義塾に申し入れておられます。義塾によって選定された建設業者が、そうした保存を実現する高い技術力を持っていることは言うまでもありません。現時点で不足しているものは、義塾の決断のみです。

私たちは、義塾の決断を欠いたまま、時間切れによって、一度破壊されれば復元不能な文化遺産が破壊されてしまうことを恐れます。私たちは、今後、必要とされる場合には、仮処分の申請等、法的な対抗措置をとることを含めて、様々の手段で、新萬來舎・ノグチルームの有効な保存の実現を広く訴えていく所存です。

以上の諸点を踏まえ、私たちは、義塾が新萬來舎・ノグチルームの保存策について再考されるよう改めて要望するものです。

なお、本要望書に対するご回答は、3月11日午後5時までに、下記連絡先にいただければと存じます。また、本要望書の写しを担当の吉田和夫常任理事にお渡ししたことを付言いたします。

2003年3月7日

新萬來舎・ノグチルームの保存を求める会
代表世話人　河合正朝（文学部）・松村高夫（経済学部）
事務担当　矢野久（経済学部）・寺出道雄（経済学部）

【資料9】

平成15年3月11日
新萬來舎・ノグチルームの保存を求める会
代表世話人　河合正朝様
　　松村高夫様
事務担当　　矢野　久様
　　寺出道雄様

慶應義塾長
安西祐一郎

要望書に対するご回答

新萬來舎・ノグチルームの保存を求める会からの要望書を拝見いたしました。慶應義塾における文化的遺産の保存に関するご要望のご趣旨を十分理解するものであります。慶應義塾としましても全く同じ趣旨に基づいて計画を進めて参りました。ここにご回答申し上げます。

貴会のご主張に対しまして当方の見解を以下に申し上げます。

まず、萬來舎の重要部分、とりわけ、ノグチルームやノグチガーデン、その入口及び螺旋階段、そしてこれらの2階部分のすべてを慶應義塾は移築して保存する方針でございます。貴会がご主張されますように、萬來舎の重要部分は基本的に移築され、萬來舎の文化的な意義の低下に繋がるような移築ではないと考えております。なお、現状保存を要望される米国イサム・ノグチ財団のサダオ理事は新校舎建設敷地とオーバーラップしない部分の保存をご希望でしたが、その部分には萬來舎入口、螺旋階段、ノグチルームに面していない庭園部は含まれませんので、これらの保存はできないことになります。今回の移築部分は、それらをすべて含み、文化財の保存という立場からも十分な移築と考えております。

次に、上記の移築が「生きた鳥を剥製にし、棚に飾るようだ」と評される部分「移築」であるという評価には、異議を唱えるものであります。今回の移築は、彫刻家、建築家らの専門家のアドバイスに基づき、文化的、歴史的価値を損なわないように十分配慮されたものであると確信しております。この移築によって、新校舎の建設に伴って建物に取り囲まれること

による萬來舎の文化的価値の低下を防ぐばかりでなく、萬來舎精神の再現を試みることができると考えております。

日本建築家協会保存問題委員会小西委員長は、別の場所への移築も保存の一つの方法であるとお話しされました。その意味では今回の移築もその一つであると考えています。

最後に、義塾の決断を欠いたままというご趣旨は理解できません。保存に関する義塾の決断は既に下されており、その内容については平成15年1月20日の評議員会および1月21日の東館8階での第3回説明会において説明されております。

限られた資源である三田キャンパスを21世紀に相応しいものとする総合的判断の下、保存と開発の両立を図り、過去の記憶だけでなく、未来の記憶に対しても責任を持つ立場から今回の決定を下しております。同じ塾に関わる皆様にあっても是非ご理解いただきたく存じます。

なお貴殿らからの要望書には仮処分申請に言及されておりますが、貴殿らにはその適格はないものと考えますので、その旨申し添えます。

【資料10】

再要望書

慶應義塾長
安西祐一郎殿

私たちは、先に提出した「要望書」(3月7日)において、新萬來舎・ノグチルームの有効な保存を求めました。しかるに、新萬來舎・ノグチルーム問題に関し、現時点で私たちが知り得ている義塾の最終的な見解は、「要望書に対するご回答」(3月11日)に示された、従来のノグチルーム部分「移築」案を是とする内容のものです。私たちは、そのことを深く遺憾とするものです。

新萬來舎・ノグチルームの建築的・美術的価値について、ここで改めて詳しく述べることはいたしません。その点については、「保存ワーキンググループ」(座長・前田富士男文学部教授)の「ノグチルーム保存WGによる活動報告ならびに答申」(2002年12月12日)も、再検討を要請しております。

また、何が新萬來舎・ノグチルームの有効な保存であるかについても、上記文書、およびそれに添付された「意見交換会　開催記録」に収録された、西川杏太郎元東京国立文化財研究所所長(塾員・前文化財保護審議会会長)を始めとする方々のご意見に尽きております。西川氏は、「第二研究室のように大地に根をおろすようなモニュメンタルな文化財は、そこに存在することでまず意味があるのだと思う。幸いなことに、計画案の図面では新校舎の敷地に第二研究室の北西側の部分がかかっているだけのようである。そうであれば、ノグチ・ルームの部分だけでも現状のまま残し、新校舎との接合部分の違和感は設計者の技量によって旨く処理することによって、

ノグチ・ルームを残すことが可能ではないか。そうすれば谷口先生が非常に苦労して設計された螺旋階段の部分も残すことができる。この方法は部分的にではあるが、オリジナルをさほど壊さない興味深い保存方法として、逆に評価されるのではないかと思う」として、新校舎の建設と文化財の保存との両立が可能なことを指摘しております。

塾長が、以上のような専門家の見解をご承知の上で、なお「移築」案を是とされることは、以下のとおり社会的にも法的にも許されることではありません。

義塾は学問の府として本来文化の護り手であるべきです。にもかかわらず、これまでに義塾自身が「日本建築史を飾る義塾の建築物」として誇ってきた世界史的意義をもつ文化財を破壊することは、到底あってはならないことです。まして、本件文化財の著作権者の同意も得ず、文化財を壊すことは明らかに著作権法に違反する行為でもあります。また、充分な具体的議論もなく、あまつさえ義塾自身が依頼したワーキンググループの答申に反し、単なる一方的な説明によって文化財を破壊することは、義塾の長い伝統に汚点を残すものであります。

義塾は、新萬來舎・ノグチルームの重要部分を現状の位置で保存し、文化の護り手としての責務を果たすべきであります。

塾長が18日に私たちとの会見を希望されておられる旨お伝えいただいております。そのことにつき付言させていただきます。

先の塾長のご回答には「貴殿らからの要望書には仮処分申請に言及されておりますが、貴殿らにはその適格はないものと考えます」とありますが、新萬來舎・ノグチルームと新校舎の両立をめざして、より建設的な方向を求めている私たちにとって、このような非建設的・排他的な塾長からの回答は、極めて心外であり、深く遺憾とするものであります。一方で、このような文書回答を私たちに出しながら、他方で私たちとの話し合いを求めることの非一貫性を私たちは到底理解できません。

なお、私たちは、以上に述べたような建築的な意見交換ができるようであれば、塾長と会見させていただくことにやぶさかではありません。しかし、それが私たちに対する一方的な説得の場となるなら、私たちは、むしろ法の場での応答を選択させていただきます。

本意見書に対するご回答は、3月17日午後6時までに、下記連絡先に文書でいただければと存じます。短い時間でのご回答のお願いになりますが、事態の緊急性にかんがみ、なにとぞご諒解下さいますようお願い申し上げます。

2003年3月15日

新萬來舎・ノグチルームの保存を求める会
代表世話人　河合正朝・松村高夫
事務担当・矢野　久・寺出道雄

【資料11】

The Isamu Noguchi Foundation, Inc.
March 21, 2003

Dear Professor Anzai:

We have received your letter of March 3, 2003 concerning Keio University's proposed relocation of "Shinbanraisha".

In the event that you and your colleagues at Keio may not already be aware of it, I must point out that we have been advised that the Isamu Noguchi Foundation, Inc. holds the copyright to Shinbanraisha as a unique work of art that is fully protected under Japanese law. As a result, no action of any kind can be initiated regarding the work without the authorization of our Foundation, as the copyright holder. Because of the board's legal and ethical responsibility to preserve and safeguard Noguchi's artistic legacy, the Foundation is not in a position to grant this authorization.

As I wrote in my letter of February 13, 2003: "Our board feels very strongly that moving or otherwise modifying the site-specific room and garden Noguchi created especially and exclusively for the Shinbanraisha would not only frustrate the artist's intent but would also have irreparable damage on a work, that in the course of the past five decades, has come to be internationally regarded as a milestone in the history and development of twentieth century art, not only in Japan but in the rest of the world".

In view of these circumstances, I am sure that Keio will now want to take all measures necessary to insure that Shinbanraisha remains intact in its present location. Preserving Shinbanraisha and constructing a new School of Law on Keio's Mita campus are not mutually exclusive goals. With the talent and ingenuity available to the University, we here at the Foundation are confident that an appropriate solution can be found that satisfies Keio's-space needs while at the same time honoring and preserving Noguchi's priceless contribution to the aesthetic and creative life of your distinguished institution.

Sincerely yours,
THE ISAMU NOGUCHI FOUNDATION, INC.
Isaac Shapiro, President

【資料12】

The Isamu Noguchi Foundation, Inc
April 9, 2003

Dear Professor Anzai:
I would like to convey to you the results of the meeting that Shoji Sadao and I had with Professor Yoshida on April 1st regarding Shinbanraisha. Professor Yoshida presented drawings illustrating Keio's position on Shinbanraisha and the problems involved with moving the new building away from Shinbanraisha as we have suggested. We are aware of the adverse effect this move would have on your budget and schedule; however ,the position of our Board is that the building designed by Yoshiro Taniguchi and the Noguchi designed Shinbanraisha room and its adjacent sculpture garden form a site-specific composition whose artistic integrity would be compromised and destroyed if it were to be moved. We are, therefore, still opposed to the revised plan as presented to us by Professor Yoshida. We have given our Power of Attorney to the copyright we hold on the work to a group in Japan of which you are aware and, as we informed Professor Yoshida, further negotiations regarding Shinbanraisha should be conducted with this Japanese group. We still believe that with the architectural and engineering talent available to Keio a viable solution acceptable to both sides can be found.
Sincerely Yours,
THE ISAMU NOGUCHI FOUNDATION, INC.
Isaac Shapiro
President

【資料13】

September 17, 2003

Dear Professor Anzai:
You will find attached to this letter the text of a resolution adopted unanimously by the Board of Trustees of Isamu Noguchi Foundation on September 16, 2003.
I look forward to meeting Professor Kimijima next week here in New York.
Sincerely yours,
THE ISAMU NOGUCHI FOUNDATION, INC
Isac Shapiro
President

Attachment
Resolved that,
The Isamu Noguchi Foundation (New York) remains strongly opposed to the relocation of any portion of Shinbanraisha (Noguchi Room); is of

the firm view that the Noguchi Room could and should be recreated on its original site in its original form; that the feasibility of doing this has not been adequately expired by the Keio University administration; that, before any further steps are taken to relocate the Noguchi Room, a feasibility study should be undertaken without delay, with the participation of the Keio University administration, Taise Corporation, the architects' group in Japan headed by Professor Hanzawa and representatives of the Taniguchi family; and that a Report containing the results of such study be submitted to all interested parties promptly after its completion, after which representatives of all parties should meet a consensus on how to proceed.

【資料14】

SEMINAL WORK BY NOGUCHI AT TOKYO'S KEIO UNIVERSITY IS DESTROYED

International Consortium of Arts, Architecture, and Preservation Professionals
Had Been Establishes to Save Noguchi Room an Sculpture Garden

For Immediate Release, New York, New York, July 9, 2003…The Isamu Noguchi Foundation in New York learned last week that Tokyo's Keio University had proceeded with the dismantling of a site-specific master piece of post-war art and architecture designed in 1952 by Japanese-American sculptor Isamu Noguchi in collaboration with architect Yoshiro Taniguchi. The action took place following an unsuccessful lawsuit in Japan intended to block destruction of the work, and despite ongoing strong protests by several parties, including the Noguchi Foundations in New York and Japan, an international consortium of professionals established to save the work, and professors at Keio who had petitioned the University.

The work, known as Shin Banraisha——set within a building of the same name—— comprised a room and garden located on the ground floor of a building at Keio University, in Tokyo. Designed in honor of Noguchi's farther, a prominent Japanese poet and instructor at Keio University, it has been dismantled by the University as part of a plan to expand its law school.

Isaac Shapiro, President of the Isamu Noguchi Foundation, New York, states, "The Isamu Noguchi Foundation in New York was deeply saddened to learn that Keio University had destroyed Shin Banraisha, the internationally acclaimed artwork on its main campus in Tokyo. The

site-specific work, with its extraordinary faculty room and garden, had long been considered a milestone in twentieth-century Japanese culture life. The Foundation repeatedly articulated to the University its position that to alter Shin Banraisha in any manner would be to destroy it. As a site-specific work of art, relocating or attempting to recreate it elsewhere, as the University is now proposing, would inevitably change its original concept as well as the relationships of its components, which were carefully created by the artist and essential to the contemplative nature of the room and garden. The destruction of Shin Banraisha is a loss not only to the students and faculty of Keio University and the Japanese public, but also to the international cultural community."

Shoji Sadao,architect and Trustee and former Executive Director of the Isamu Noguchi Foundation in the United States, comments, "Keio University's actions have deprived Tokyo's urban landscape of a unique haven of tranquility and incomparable beauty. We are inestimably disappointed that the University, an institution dedicated to instilling in its students a respect for creative effort, has not fulfilled its public trust and preserved what is unquestionably one of the most important structures on its campus."

The Noguchi Room, together with the contiguous sculpture garden, is internationally regarded as a milestone in the history of twentieth-century art. It was one of three public works the artist created in 1951-52, and the first interior by Noguchi to be realized anywhere. One of the others, the Readers Digest Gardens, in Tokyo —— the artist's first realized garden —— was previously demolished. Another, comprising two bridge hand-rails that are an integral part of Peace Park, in Hiroshima, is the final remaining work in this landmark trio. It, too, is at risk, from a proposal to widen the bridge.

The cultural and historical significance of *Shin Banraisha* is profound. It was designed by Noguchi in collaboration with the distinguished Japanese architect Yoshiro Taniguchi (father of Yoshio Taniguchi, architect of The Museum of Modern Art's renovation project currently under construction in New York City) at a critical period in the development of modern art in Japan. With the country recovering from the devastation of war, with severely limited resources, Shin Banraisha was a powerful symbol of post-war regeneration in Japan. Moreover, it was the artistic and conceptual link to a monumental work by Noguchi that is about to open in Sapporo, Japan.

Due to the fact that it was created for and aesthetically united with its original location, reloading Shin Banraisha, as initially planned by

the University, would gravely undermine its artistic integrity. Support for preserving it *in situ* led to the creation of an *international Committee to Preserve Shin Banraisha*, with several hundred members. In addition to the International Committee, the faculty of Keio University, including that of the law school, which stands to benefit from the expansion, circulated its own petition calling for the *in situ* preservation of Shin Banraisha.

* * *

For additional information, contact Jeanne Collins or Lucy O'Brien, at Jeanne Collins & Associates, LLC, New York City, xxx

【資料15】

I would like to report the following developments on the Shin Banraisha saga:

1. Richard Lanier has written a letter to Mr. Kuroda summarizing the points discussed in our meeting of July 27th. The points he made in his letter were: (i) We are opposed to reproducing Shin Banraisha on the 3rd floor of the new building. If Keio seeks to reproduce the room and garden anywhere other than in their initial location, the Isamu Noguchi Foundation would have no choice but to publicly disassociate itself from that effort, (ii) as we have been informed that Keio has made a final decision not to rebuild on the original site, we see an opportunity for some of the elements in Noguchi's design - the furniture, sculpture and perhaps the fireplace - to be recombined in a fresh and creative space to be designed which would be far more interesting and exciting than a mere copy, (iii) the Noguchi Foundation remains prepared to collaborate with Keio in arriving at an appropriate new design, provided we an reach prior agreement on terms and conditions that will ensure that the essence, not a reproduction, of Noguchi's work can be preserved.
2. Mr. Kuroda has responded with no corrections or objections to Richard's summary. Its contents have been relayed to President Anzai and to the Experts Committee.
3. Richard has been in telephone contact with Kengo Kuma and has sent him a copy of his letter to Mr. Kuroda. Mr. Kuma supports our position. He told Richard that Mr. Senda's role is very important on the Experts Committee. His opinion carries great weight with President Anzai and others. Mr. Senda's strong preference would be to reproduce the Noguchi Room and Garden on the 3rd floor of the new building. He may be flexible about the interior space, the

Noguchi Room, but is particularly concerned about preserving the basic character of the original "Taniguchi Building".

4. Mr. Yoshida has instructed Taisei to send a representative or two to New York to meet with the NY Foundation during the first two weeks in September. I will, however, be leaving for Japan on September 3rd and will return on the 12 th so

I may miss this meeting. Mr. Yoshida wanted Mr. Kuma to come too, but he will be in Venice for the Biennale.

Regards,

Shoji Sadao

【資料16】

Date: Wed, 18 Aug 2004 09:51:57 -0400

Dear Messrs. Kawashima, Kawai and Sunakawa:

I have just spoken with Richard Lanier who was requested by Isaac Shapiro, who is on vacation in England, to write a letter to Kuroda-riji on behalf of all who attended the meeting on July 27 summarizing the points we made. He will also ask for a copy of the tape recording. This letter will be faxed today to President Anzai's fax number (I don't have Kuroda-riji's fax number) and also be mailed to him. I know you would I like to receive a copy of this letter. I will try to get permission from Isaac Shapiro for me to do so.

Richard Lanier will also be in touch with Kengo Kuma to explain the past history of our position and the lack of any real effort by Keio to discuss and negotiate in good faith with us.

Sincerely, Shoji Sadao

【資料17】

Greetings,

This e-mail is to follow up on my telephone call to each of you regarding the meeting with Kuroda-riji who was accompanied by Koji Yamaki, manager of Keio Academy here in Purchase, New York. On our side the attendees were Ike Shapiro, Richard Lanier, Hugh Hardy, Bonnie Rychlak and myself. A tape recording of the meeting was made by Kuroda-riji.

As I relayed to each of you, the advice of the Noguchi Foundation was to state clearly that we are not in favor of Shin Banraisha being reproduced on the 3 rd floor of the new building. We would like Keio to design an entirely new space that has no relationship to Shin Banraisha. We have no objection to individual works of art like the sculpture, terra cotta wall

and furniture being displayed in the new space or even having a garden on the roof, but these spaces should be designed without regard to the original orientation of the Noguchi Room and Sculpture Garden. We stated that the new space should be designed from a fresh point of view; it should respond to the space and structure generated by the new building and look to the future needs of Keio.

Kuroda-riji will now go back to Tokyo and discuss our position with a committee of experts who will be advising Keio on Shin Banraisha. These experts are:

Kazuo Yoshida, Vice President, Keio

Mitsuru Senda, Professor, Tokyo Institute of Technology

Hirotada Kurokawa, Professor, Sculptor, Musashino College of Art & Design

Kengo Kuma, Professor, Faculty of Science and Technology, Keio

Riichi Miyake, Professor, Faculty of Environmental Information, Keio

Yasushi Ikeda, Assoc. Professor, Faculty of Environmental Information, Keio

Yoshihide Konno, Director, Dept. of Facilities Management, Keio

Masaru Yanome, Manager, Dept. of Facilities Management (Shinanomachi), Keio

Yasuo Nakauchi, Japan Association for Conservation of Architectural Monuments

Takanon Ichikawa, Design Division, Architectural Design Group, Taisei Corp.

It has been a long struggle, and I would like to thank all of you for your support. However, it is still not over as we do not know what the expert committee will recommend. If any of you have any contact with any of the above committee members I hope you will lobby them to be sure our recommendations are followed.

As I do not have the e-mail address of Aoki-san, Sunakawa-san or Hanzawa-san please send this message to them. Also, please send my special message to Aoki-san for the safe and rapid recovery of his wife from her illness.

With much gratitude,

Shoji Sadao